

博多79

— 博多遺跡群第123次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第670集

2001

福岡市教育委員会

博多 79

— 博多遺跡群第123次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第670集

2 0 0 1

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面し、はるかアジア大陸をのぞむ福岡市は、古くから中国ならびに朝鮮半島との海外交流の窓口として栄えてきました。

福岡市では、市内に分布する多くの文化財の保護、活用に努めていますが、近年の開発事業に伴い、やむを得ず失われてゆく埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

本書は福岡市博多区須崎町1-1において実施された博多遺跡群第123次調査の発掘調査報告書です。今回の調査地点は中世博多沖の浜の西端部に位置しており、中世前期の井戸や土壙、柱穴などの生活遺構ならびに輸入陶磁器や土師器等の遺物が大量に出土したことから、当時の人々がここで生活をしていたことが確認できました。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。最後になりましたが、発掘調査費用の負担をはじめとするご協力を賜りました藤巻信義氏をはじめ、関係各位に、心から感謝申しあげます。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　　言

1. 本書は博多区須崎町1-1におけるホテル建築に伴い、福岡市教育委員会が平成12年2月25日から同年3月24日にかけて実施した博多遺跡群第123次調査の報告書である。
2. 遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付している。遺構略号は溝がSD、井戸がSE、土壙がSK、柱穴がSP、その他の遺構がSXである。
3. 遺構および遺物の実測は上角智希がおこなった。
4. 製図は上角、久家春美が、拓本は宮坂環がおこなった。
5. 遺構写真撮影は上角が、遺物写真撮影は柳智子がおこなった。
6. 本書使用の方位はすべて磁北である。
7. 本書に係る遺物・図面・写真是、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
8. 本書の執筆・編集は上角がおこなった。

目 次

第一章 はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査組織	1
3. 位置と環境	1
第二章 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 主な遺構と遺物	5
(1) 中世前期の遺構と遺物	5
(2) 近世の遺構と遺物	15
(3) その他の出土遺物	18
第三章 小 結	19

挿 図・表 目 次

第1図 博多遺跡群の位置 (1/25,000)	2
第2図 調査地点の位置 (1/750)	2
第3図 遺構配置図 (1/80)	3
第4図 SE01、02井戸実測図 (1/40)	6
第5図 SE01、02、34出土土器 (1/3)	7
第6図 SK07、08、12出土遺物 (1/3)	9
第7図 SK11土壙墓実測図 (1/10)	10
第8図 SK23~26出土土器 (1/3)	11
第9図 SK27出土土器① (1/3)	13
第10図 SK27出土土器② (1/3)	14
第11図 SK28、30出土土器 (1/3)	15
第12図 SE14出土土器① (1/3)	16
第13図 SE14出土土器② (1/3)	17
第14図 その他の出土遺物 (1/3、1/1)	18
第1表 主要遺構出土土器破片数	19
第2表 遺物観察表	21

図版目次

- Ph.1 調査区全景（南西から）
- Ph.2 SE02井戸周辺（東から）
- Ph.3 SE01井戸（南東から）
- Ph.4 SK27土壙（北西から）
- Ph.5 SK11人骨出土状況（北から）
- Ph.6 SK23出土土師器
- Ph.7 SK07出土青磁碗
- Ph.8 SE14出土染付皿
- Ph.9 SK27出土土師器
- Ph.10 SE34出土青磁碗（24）
- Ph.11 包含層出土青磁碗（204）
- Ph.12 包含層出土白磁碗（205）
- Ph.13 包含層出土白磁火入（206）
- Ph.14 SK07出土青磁碗（30）

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成11年6月21日、藤巻信義氏より福岡市博多区須崎町1-1におけるホテル建設に先立ち、埋蔵文化財事前審査申請書が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、平成12年1月27日に試掘調査を実施し、地表下250cmで基盤の黄褐色粗砂層にあたり、その面で薄い黒色砂質土の遺構を確認した。よって本調査が必要であるとの結論に達し、協議の結果、敷地面積312m²のうち190m²について記録保存のための発掘調査（本調査）を実施することで合意した。本調査は平成12年2月25日から平成12年3月24日にかけて実施した。

2. 調査組織

調査は以下の組織でおこなった。

調査委託 藤巻信義

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（前任） 生田征生（現任）

調査総括 文化財部長 柳田純孝

埋蔵文化財課長 山崎純男

埋蔵文化財第2係長 力武卓治

調査庶務 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

試掘担当 杉山富雄、加藤隆也

調査担当 上角智希

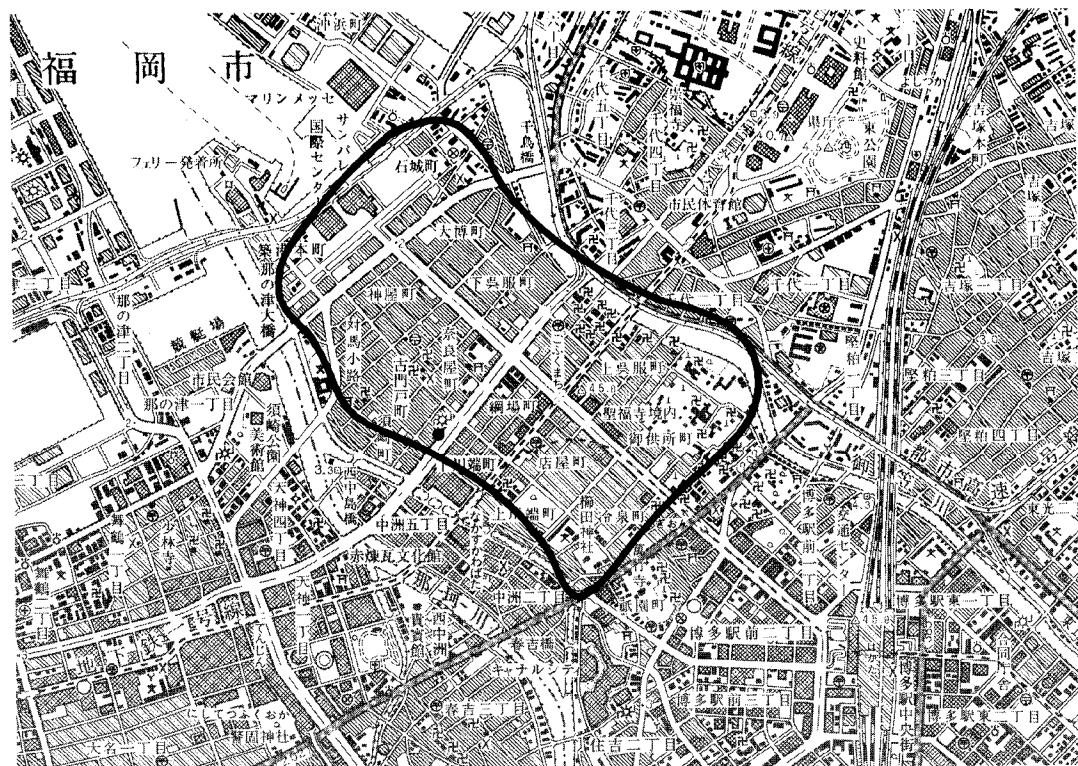
調査作業 長野嘉一、加藤常信、中村桂子、沢田悦子、瀬戸啓治、三浦力、一ノ瀬フミヨ、相良謙一、小原祐子、宮田知明、甲斐正耕、大塙皓、坂下達男、井料国彦、岡部静江、高崎秀巳、浅井伸一

整理作業 宮坂環、平川めぐみ、久家春美

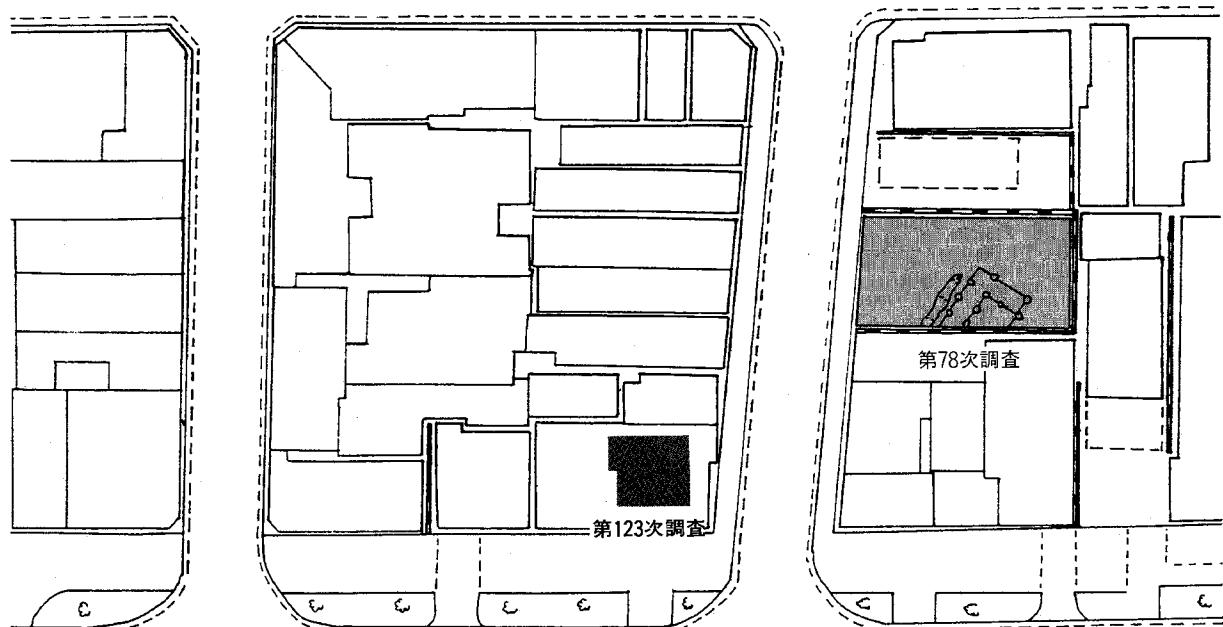
3. 位置と環境

博多遺跡群は福岡平野のほぼ中央、那珂川（博多川）と御笠川（石堂川）に挟まれた古砂丘上に立地する。現在の地理で言えば、JR博多駅から北西へ、湾岸の福岡サンパレスまで真直ぐに伸びる太博通りを中心軸として南北に長い長方形の範囲である。中世段階の博多は南北に3列の砂丘が並んでおり、内陸側の2砂丘を「博多浜」、海側の砂丘を「息の浜」と称している。「博多浜」には古くから遺跡が存在し、古くは弥生時代中期の円形竪穴住居や甕棺墓が検出されている。「息の浜」と「博多浜」の境は現在の呉服町交差点付近にあたるが、北の「息の浜」の形成は新しく12世紀前半以降に埋め立てにより徐々に陸地化が進む。今回の調査地点は、「息の浜」の西端部に位置している。

紙面の制約上、博多遺跡群の詳細な説明は出来ないので既出報告書を参照していただきたい。本調査地点のすぐ東では第78次調査が、昭和通りを挟んで南側では第89次調査が実施されている。本書と関わる12世紀前半～13世紀後半の時期について説明すれば、第78次調査地点では4基の土葬墓、6体の人骨が検出されており、墓地であった可能性が高い。第89次調査地点における遺構の出現は中世末であり、12世紀頃の遺構は存在しない。おそらくまだ陸地化されていなかったのだろう。

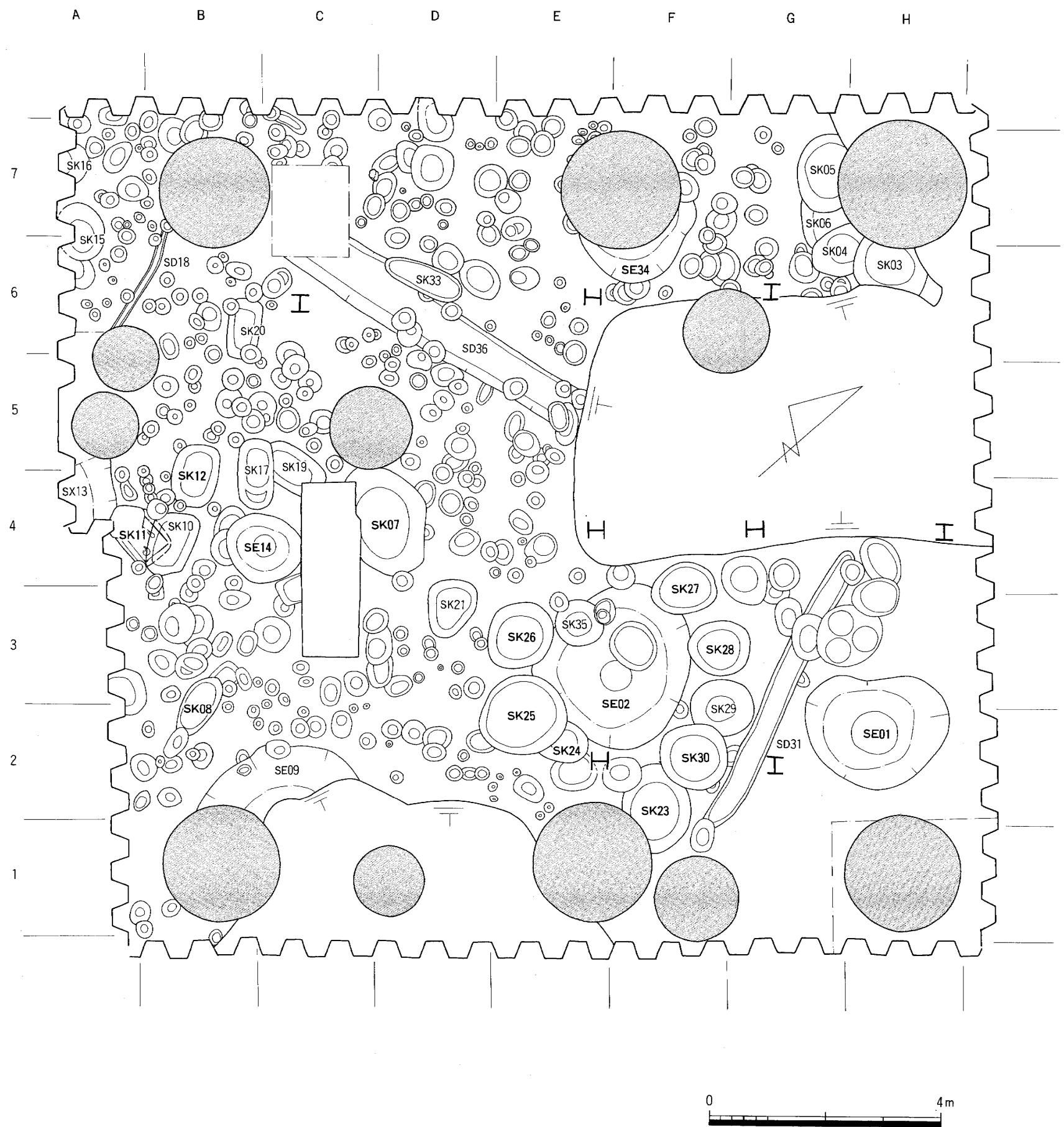
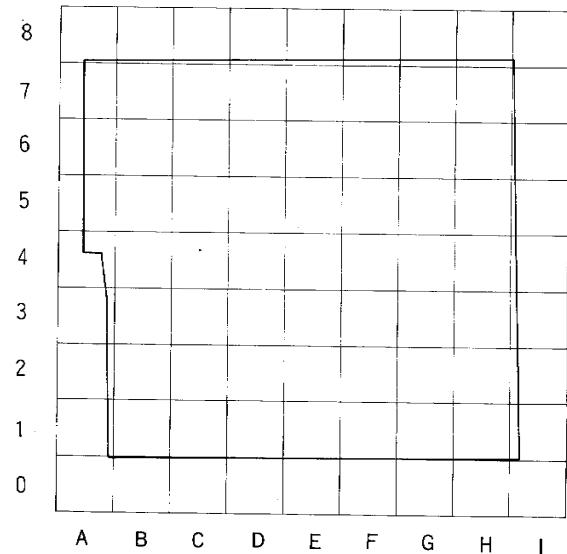


第1図 博多遺跡群の位置(1/25,000)



第2図 調査地点の位置(1/750)

遺跡名	博多遺跡群 第1 2 3次調査			調査番号	9970
所在地	福岡市博多区須崎町 1-1			調査略号	HKT-123
開発面積	312m ²	調査面積	190m ²	調査期間	2000年2/25~3/24



第3図 遺構配置図(1/80)

第二章 調査の記録

1. 調査の概要

本調査は平成12年2月25日から同年3月24日にかけて実施した。

試掘調査の結果によれば、地表下250cmにて検出された基盤の黄褐色粗砂層の上に60cmの厚さで水平堆積をみない黒茶色砂質土がのるが、この層は盛土とみられる。調査期間の制約もあり、試掘担当者と協議の結果、調査は黄褐色粗砂層上面の1面についておこなうこととした。

本調査区は中州川端地区市街地内に位置し、敷地面積が狭く交通量の多い道路に面しているため、排土の処理が問題となる。また、調査区が狭く周囲の建物と隣接しているため、掘り下げにあたっては周囲に矢板を打ち込んだ後、垂直に土を除去していくことになる。協議の結果、排土処理については、調査区内で攪乱が遺構面より下まで及んでいる部分を深く掘り下げることにより排土置き場を確保することとし、矢板打ちと表土除去については委託者側が担当し、表土除去時に調査担当者が立会・排土中遺物の表採をおこなった。表土除去には3日を要した。その後、作業員を入れて人力による精査をおこなった。

調査面積はほぼ正方形で190m²、遺構検出面の標高は2.0~2.1mである。遺構面上には新旧建築物のコンクリート基礎が多く入る上に、調査区北西と南東隅に大きな攪乱が入っており、実際に遺構を検出できた面積はさらに狭い。地山の黄褐色粗砂層上に黒色~灰褐色砂質土の遺構が掘り込まれており、遺構の検出は容易であった。遺構検出の結果、一面に柱穴、井戸、土壙が存在することがわかり、調査期間の制約もあり、非常に忙しいペースで調査をおこなった。厳しい状況の中、発掘作業に従事していただいた皆様に感謝申し上げます。記録にあたっては、調査区に2×2mのグリッドを設定し、略南北方向にA~I、略東西方向に1~7の番号を付し、A-1区という具合に各グリッドを名付けた。

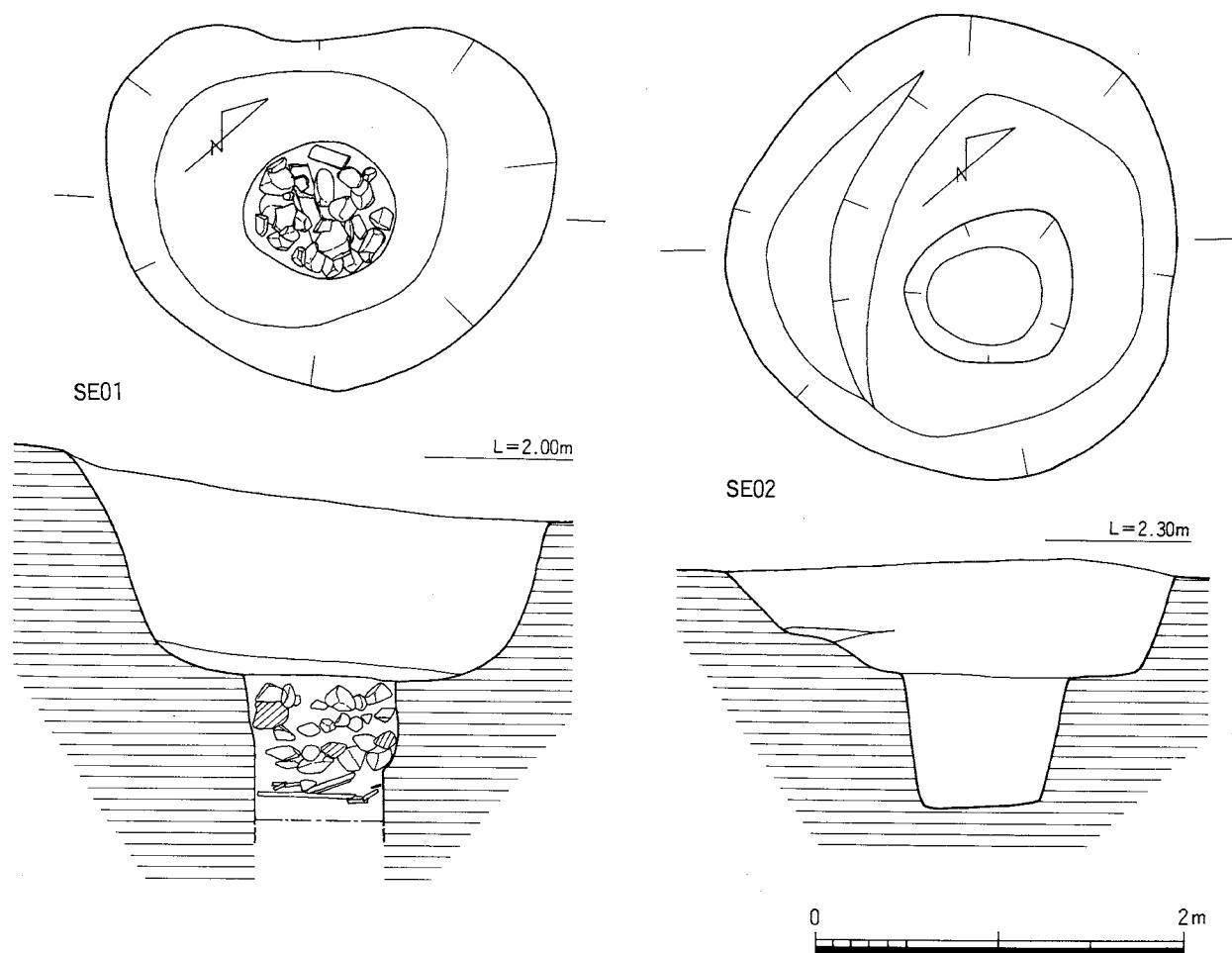
今回の調査で検出した遺構は、井戸4基、土壙25基、溝3条のほか、柱穴多数である。井戸枠は円形のプランが確認できたが、井筒の材料自体は遺存していないかった。土壙には人骨が出土した方形の墓1基が含まれる。石積み土壙はない。SE02を取り囲むように多くの土壙が位置するのが気にかかる。溝は主軸方向N-85°-Eの広めの溝とそれに直交する(N-23°-W)2条の溝で、街区の方向と関係するか。出土遺物の検討の結果、遺構の時期はほとんどが12世紀後半~13世紀前半にかけてのものであり、SE14とSK13だけは近世、17世紀前半に位置付けられる。本調査で出土した主な出土遺物は中世前期の土師器、輸入陶磁器、瓦器、陶器で、ほかに近世の染付や瓦が出土している。遺物総量はコンテナ50箱におよぶ。

2. 主な遺構と遺物

(1) 中世前期の遺構と遺物

SE01井戸 (第4図、Ph.3)

H-2グリッド周辺に位置する。堀り方の平面形は190~235cmの不整円形を呈し、ほぼ中央に直径80cmの井筒を掘り込んでいる。遺構面から180cmの深さまで掘り下げたところで湧水のため掘り下げをやめた。底のほうで縦に木目に入る木材の痕跡を検出したので、桶製の井筒であろう。井筒の中には、底に板材、その上に大量の人頭大の礫石が投げ込まれていた。



第4図 SE01、02井戸実測図(1/40)

出土遺物（第5図1～7）

1は土師器壊。口径13.0cm、器高2.7cm、底径8.9cmを測り、底部糸切り。2は土師器小皿である。口径7.9cm、器高1.5cm、底径5.8cmを測り、底部糸切りで板状圧痕を有する。3は白磁碗で、口縁端が短く外反する。口径16.0cm、灰白釉で焼成あまく外面にピンホールがみられる。4～5は青磁碗の底部。いずれも外底露胎で4は見込に花文を陰刻し底径5.4cm。5は底径5.2cm。6～7は陶器の口縁部である。壺か。6は口径11.2cmでオリーブ釉をかける。7は口径8.8cmで褐釉をかけるが、口縁上面は無釉。

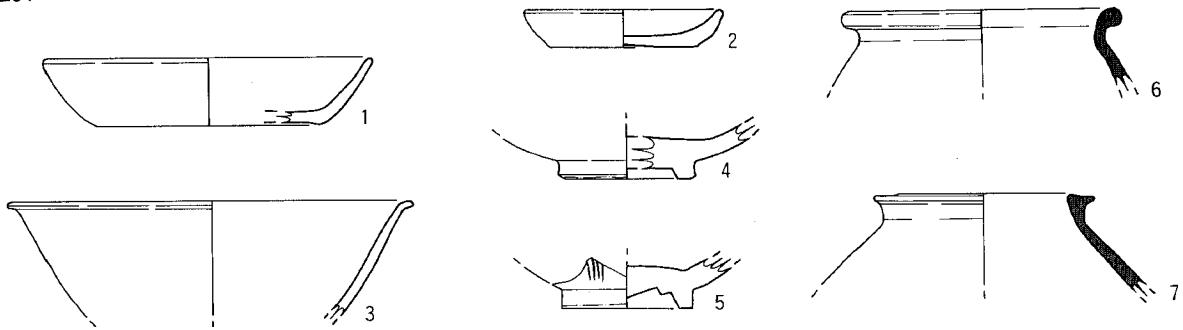
SE02井戸（第4図）

F-3グリット周辺に位置する素掘りの井戸である。堀り方は240～250cmの円形を呈する。中央東寄りに径90cmの井筒を掘り込み、遺構面からの深さは130cmである。この井戸を囲むように、周囲に8基の土壙がつくられている。出土遺物より12世紀後半に位置付けられる。

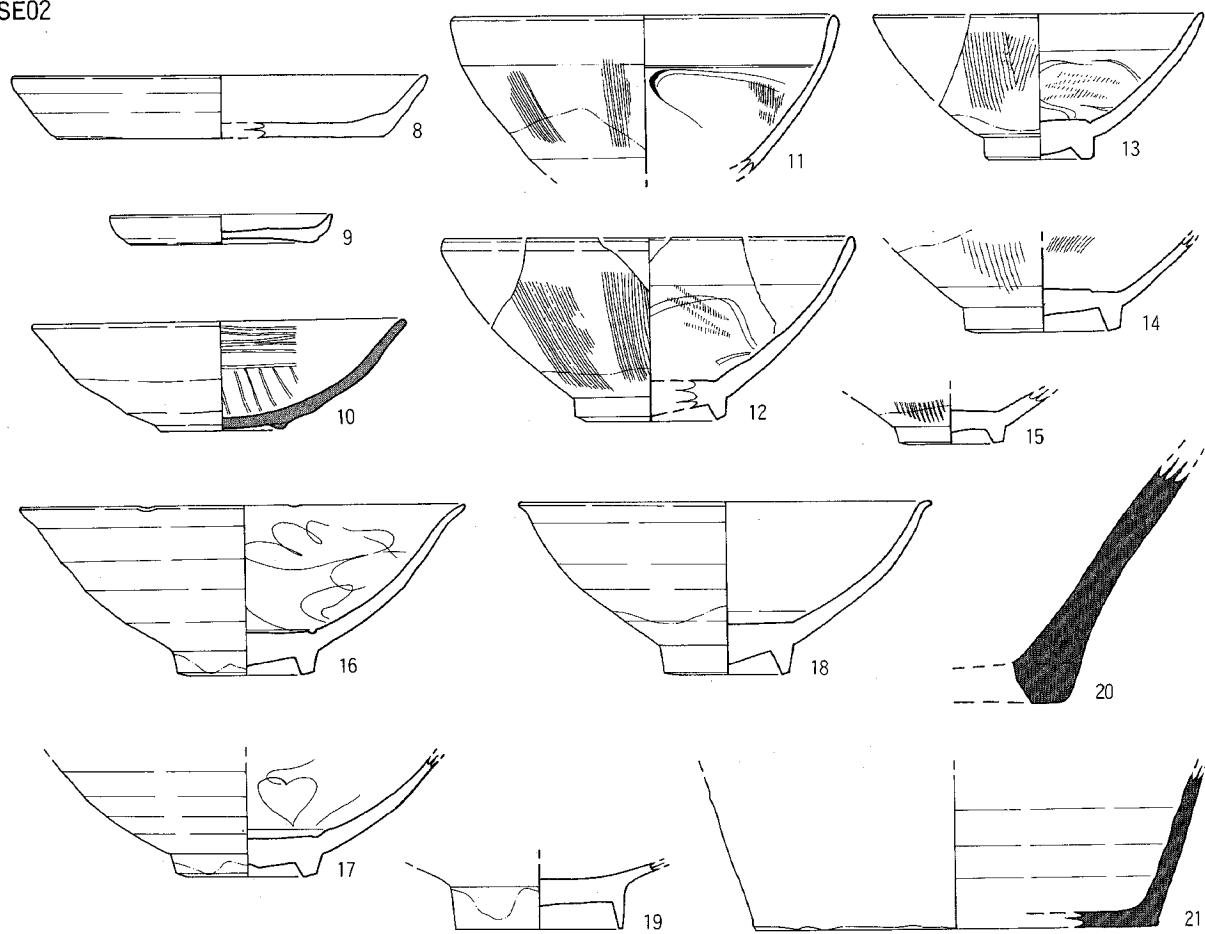
出土遺物（第5図8～21）

8は土師器壊、9は土師器小皿である。口径、器高、底径は8が16.4～2.5～12.8cm、9が8.8～1.2～7.2cmを測る。いずれも底部糸切りで板状圧痕を有する。10は瓦器碗。口径14.8cm、器高4.4cm、底径5.2cmを測る。11～15は同安窯系青磁碗である。14は見込みに蛇の目釉はぎ。16～19は白磁碗。20～21は硬く焼き締めた陶器で自然釉がかかり灰赤色を呈する。20は鉢の底部。21は底径16.0cm。

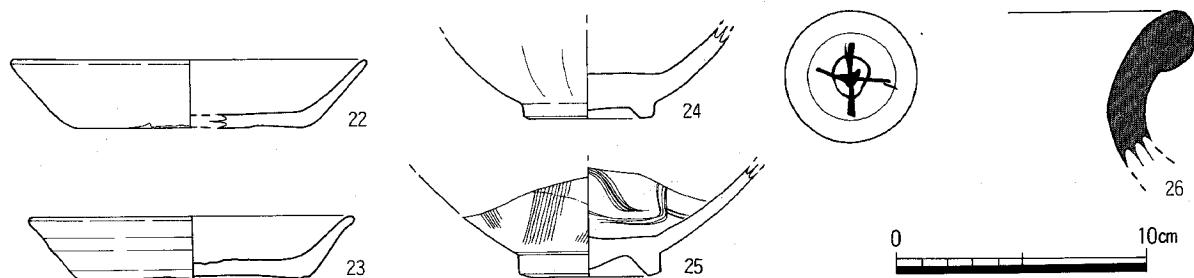
SE01



SE02



SE34



第5図 SE01、02、34出土土器(1/3)

SE34井戸

F-6 グリット周辺に位置する井戸である。コンクリート基礎によりその大部分が破壊される。平面形は径180cm程度の円形と推測される。

出土遺物（第5図22～26）

22、23は土師器坏である。22は口径14.0cm、器高2.7cm、底径9.2cmを測り、底部糸切りで板状圧痕を有する。23は口径12.8cm、器高2.5cm、底径9.0cmを測り、底部糸切り未調整。内底にヘラ状工具による回転ケズリの渦巻き痕を有する。24は龍泉窯系青磁碗で底径5.2cmを測る。外面は高台までオリーブ釉がかかり、露胎の外底に墨書がある（Ph.10）。25は同安窯系青磁碗で底径5.6cmを測る。灰オリーブ釉で、外面体部下半は露胎。細かな貫入がはいる。26は陶器甕の口縁部。硬質で暗灰色を呈する。

SK07土壙

D-4 グリッドに位置する楕円形の土壙である。南壁を試掘トレーニチによって破壊されているが、長軸190cm、復元短軸150cm、深さ70cmを測る。

出土遺物（第6図27～33）

27～30は青磁碗である。27は口径15.6cm、器高7.8cm、底径5.2cmを測る。内面見込に蓮の葉を描き、底部は非常に厚い（Ph.7）。釉色はオリーブ黄色を呈する。28は口径16.0cmを測り、内面見込に草花文を描く。29は口径15.2cm。30は底径6.4cmを測り、内底に「金玉満堂」のスタンプがある（Ph.14）。底部は厚く、高台を浅く削り出す。31、32は土師器小皿。口径、器高、底径は31が8.8-1.4-7.0cm、32が8.8-1.5-7.0cmである。いずれも糸切で、32は板状圧痕を有する。33は陶器の盤である。口径20.8cmで、オリーブ黄釉をかける。

SK08土壙

B-2、3区に位置する楕円形の土壙である。復元長軸120cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。

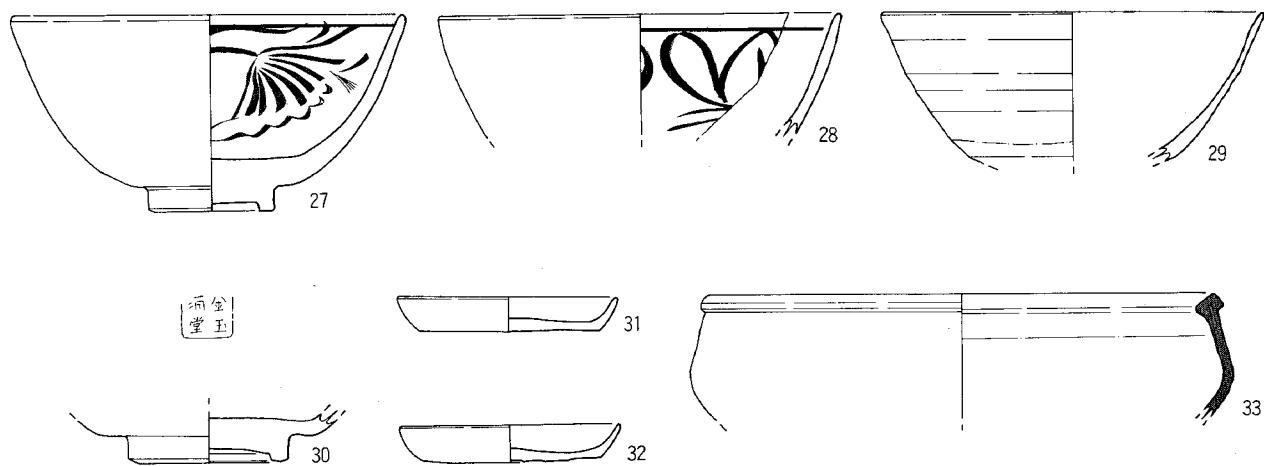
出土遺物（第6図34～41）

34、35は土師器坏、36は土師器小皿ある。口径、器高、底径は34が17.0-3.3-12.0cm、35が15.4-2.5-11.4cm、36が9.0-0.9-7.6cmである。いずれも回転糸切り離しで、板状圧痕を有する。37、38は白磁の碗。37は口径17.4cm、器高7.0cm、底径6.2cmを測り、口縁端部が短く外に折れる。高台は細くて高い。38は底径6.4cmで、内面に櫛描紋を描く。39～40は瓦器椀である。39は口径13.0cmを測る。内面のミガキは密で口唇部は内側に段を持つ。40は底径5.1cmを測り、内底にらせん状のミガキを施す。41は滑石製石鍋の耳である。

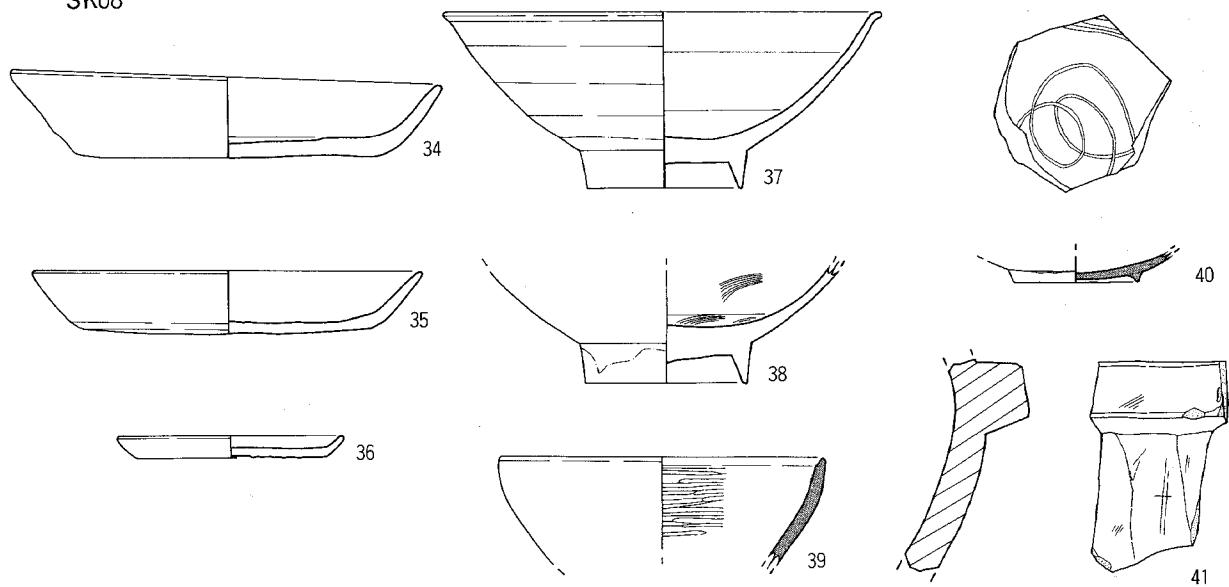
SK11土壙墓（第7図、Ph.5）

A、B-4区に位置する土壙墓で、人骨が出土した。今回の調査で人骨が出土したのはこの土壙のみである。土壙の西側は攪乱により破壊され、東側も浅い土壙SK10によって切られる。人骨の残存部位は頭蓋骨、下顎骨、歯、右上腕骨、鎖骨である。頭蓋骨は顔面が南を向き、右上腕骨遠位端は攪乱により欠損している。側頭骨にある乳様突起の発達が弱く、上腕骨も小さいことから、筋肉が比較的発達していない女性、歯の咬耗がかなり激しいことから熟年の可能性が高い。また、人骨の周囲には一部木棺の材が腐食した状態ながら検出できた。木棺は残存長52cm、幅50cmである。以上の所見よ

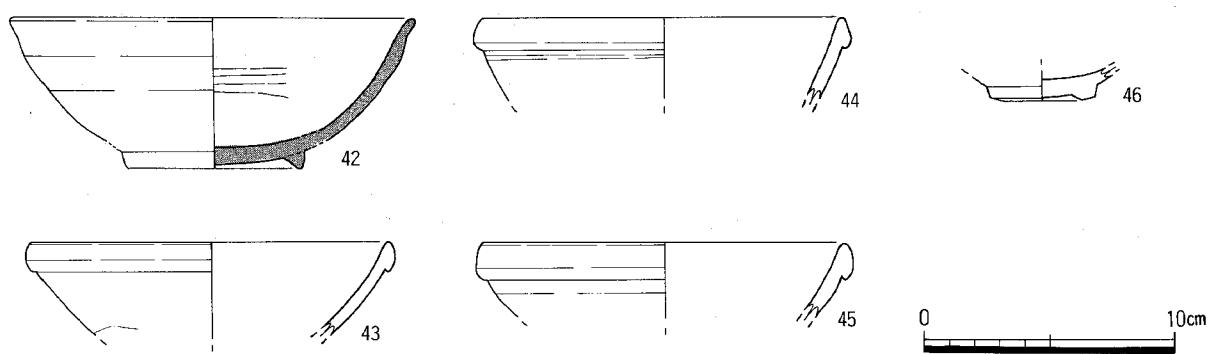
SK07



SK08



SK12



第6図 SK07、08、12出土遺物(1/3)

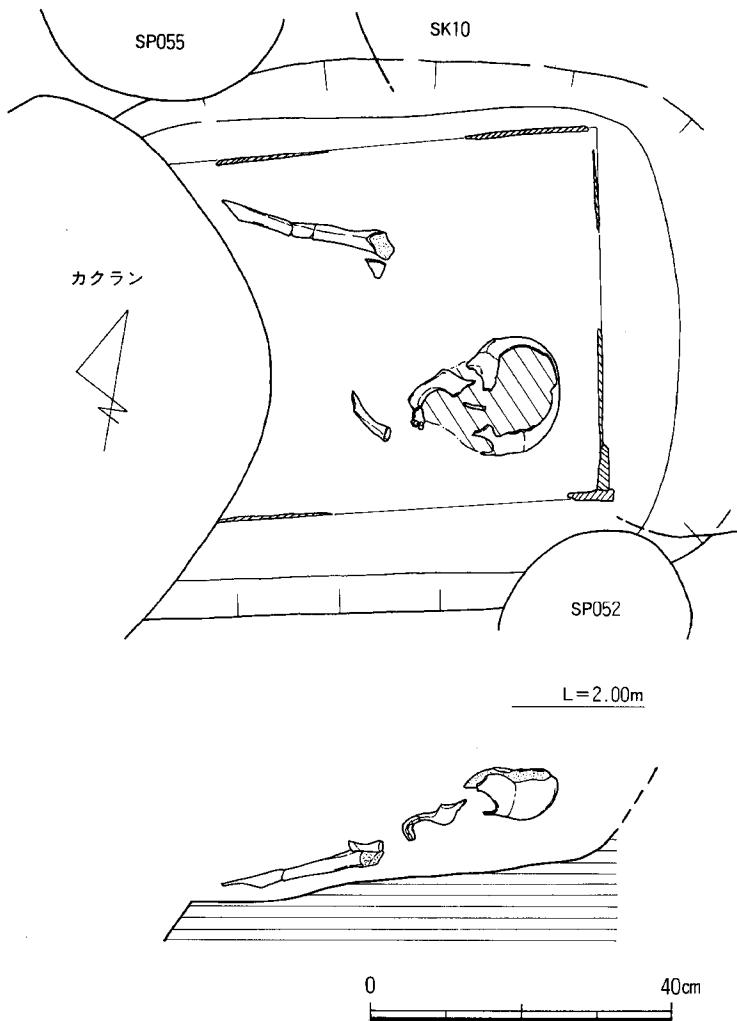
り、被葬者は熟年女性で、木棺、東頭位の仰臥葬で埋葬されたと考える。出土遺物は畿内産瓦器椀、龍泉窯系青磁碗の口縁部片、常滑の破片、土師器片が少量出土したが、図化できる遺物はない。いずれも細片であり、副葬品とはみなしがたい。

SK12土壤

B-4、5区に位置する楕円形の土壤である。長軸110cm、短軸80cm、深さ40cmを測る。

出土遺物（第6図42～46）

42は瓦器椀である。口径16.0cm、器高6.0cm、底径7.2cmを測る。内面のミガキは粗く、器壁の厚さは一定しない。在地産。43～45は白磁碗で、いずれも玉縁口縁である。口径は43が14.6cm、44、45が15.0cmを測る。46は白磁皿の底部か。底径4.2cmを測り、高台はごく浅く削り出す。



第7図 SK11土壤墓実測図(1/10)

SK23土壤

E-2区に位置する楕円形土壤で、長軸150cm、短軸110cm、深さ65cmを測る。

出土遺物（第8図47～52）

47は土師器の高台付椀で、口径13.4cm、器高4.3cm、底径6.4cmを測る（Ph. 6）。体部中央で屈曲し、口縁部はそのまま外に開く。内面はコテなでにより平滑に仕上げる。外面にすすぐが付着。48は瓦器椀である。口径14.0cm、器高4.9cm、底径5.7cmを測る。内面と外面上半に細かなミガキを密に施している。畿内産の製品。49、50、52は白磁碗である。49は口径15.8cmを測り、玉縁口縁を呈する。50は底径6.6cmを測り、底が厚く高台は浅く削り出す。52は底径6.0cmで高台は細く高い。51は青磁碗の底部である。底径7.0cmを測り、内底を蛇の目釉はぎ。

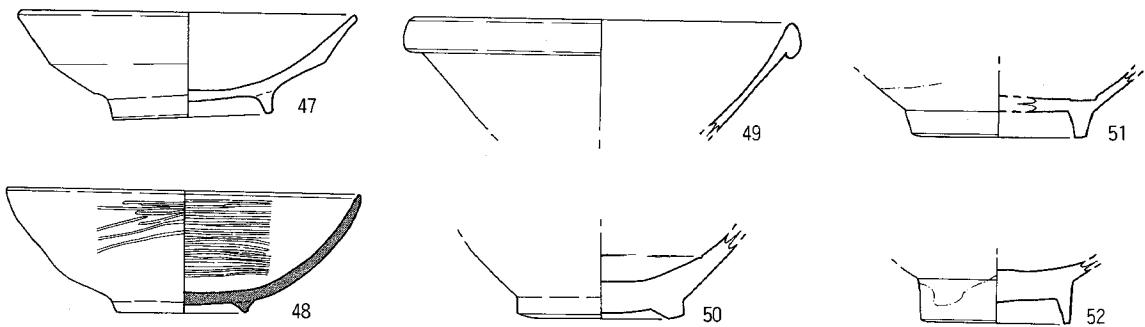
SK24土壤

F-2区に位置する楕円形土壤でSE02を切り、SK25に切られる。復元長軸100cm、短軸80cmを測る。

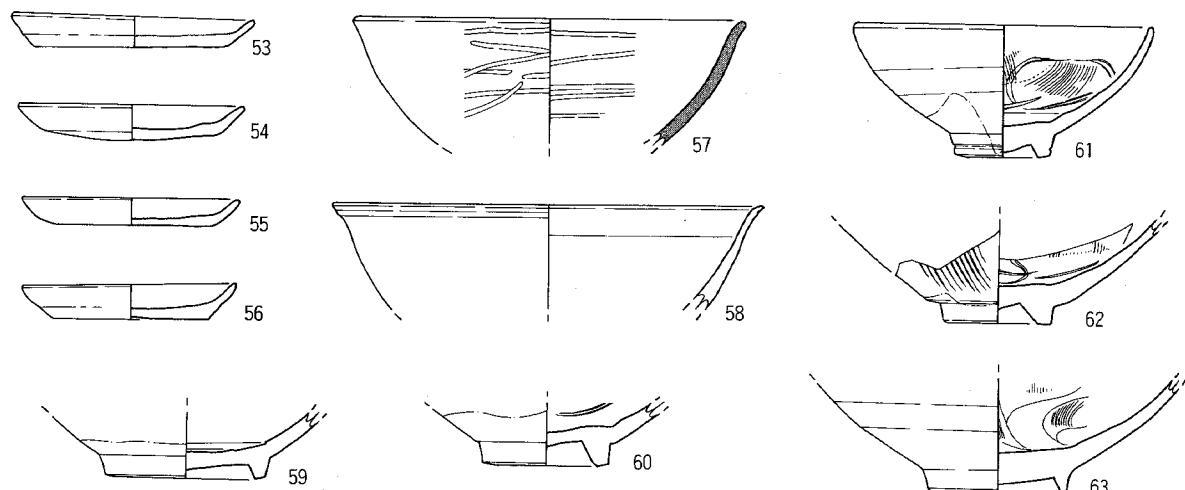
出土遺物（第8図53～63）

53～56は土師器小皿である。口径8.5～9.5cm、器高1.1～1.5cm、底径6.2～7.5cmを測る。いずれも底部糸切離して53、56は板状圧痕を有する。57は瓦器椀で、口径15.6cmを測る。内外面に細いミガキ

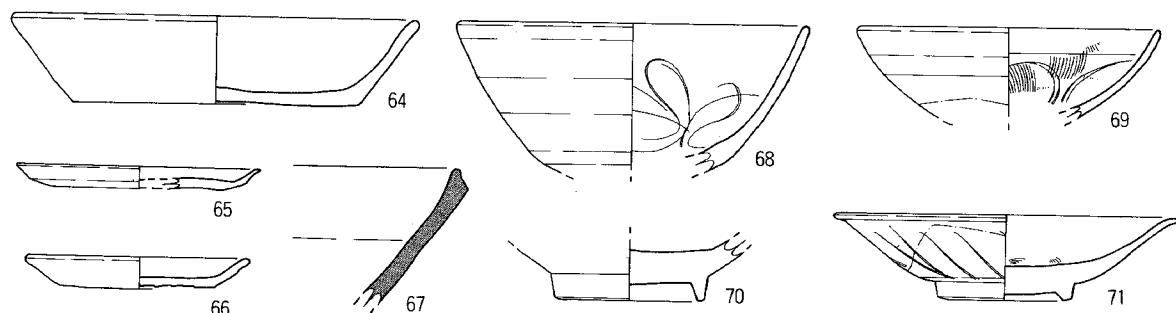
SK23



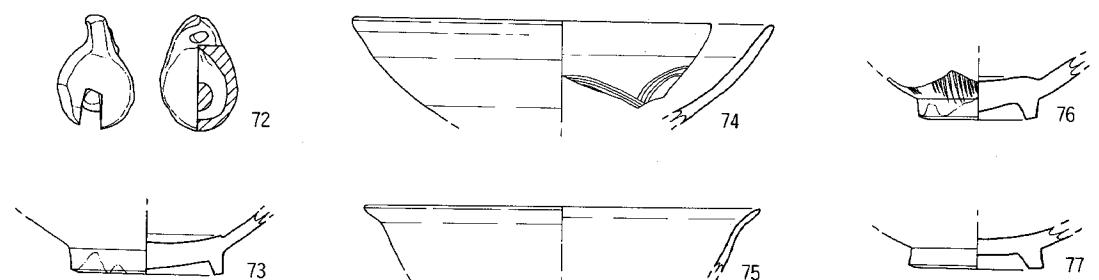
SK24



SK25



SK26



第8図 SK23~26出土土器(1/3)



を施すが密ではない。58、59は白磁碗である。58は口径17.2cmで口縁端部が短く外反する。59は底径6.4cmで内底を蛇の目釉はぎ。60～63は同安窯系青磁碗である。いずれも櫛状の施文具で内面に花文を描く。61は口径12.0cm、器高5.3cm、底径4.2cmを測り、外面は無文。62は底径4.4cmで外面に粗い櫛描文を施す。63は底径5.6cmで外面は無文で施釉しない。

SK25土壙

E-2、3区に位置する円形土壙で、径130～140cm、深さ45cmを測る。SE02、SK24を切る。人頭大の礫石が数個出土した。

出土遺物（第8図64～71）

64は土師器坏である。口径16.2cm、器高3.5cm、底径11.4cmを測り、底部糸切り離しで板状圧痕を有する。65、66は土師器の小皿である。口径、器高、底径は65が9.6～0.9～6.6cm、66が8.9～1.3～6.2cmで、いずれも底部糸切り。66は板状圧痕を有する。67は瓦質こね鉢の口縁部である。68は龍泉窯系青磁碗である。口径14.0cmを測り、内面に草花文を施す。69は同安窯系青磁碗で、口径12.2cmを測る。70は白磁碗の底部で底径6.0cmを測る。71は青磁の皿で、口径13.8cm、器高3.4cm、底径5.4cm。外面にヘラ状施文具で放射状に片彫りの線を入れ、下半は施釉しない。

SK26土壙

E-3区に位置する円形土壙で、径110cm、深さ55cmを測る。

出土遺物（第8図72～77）

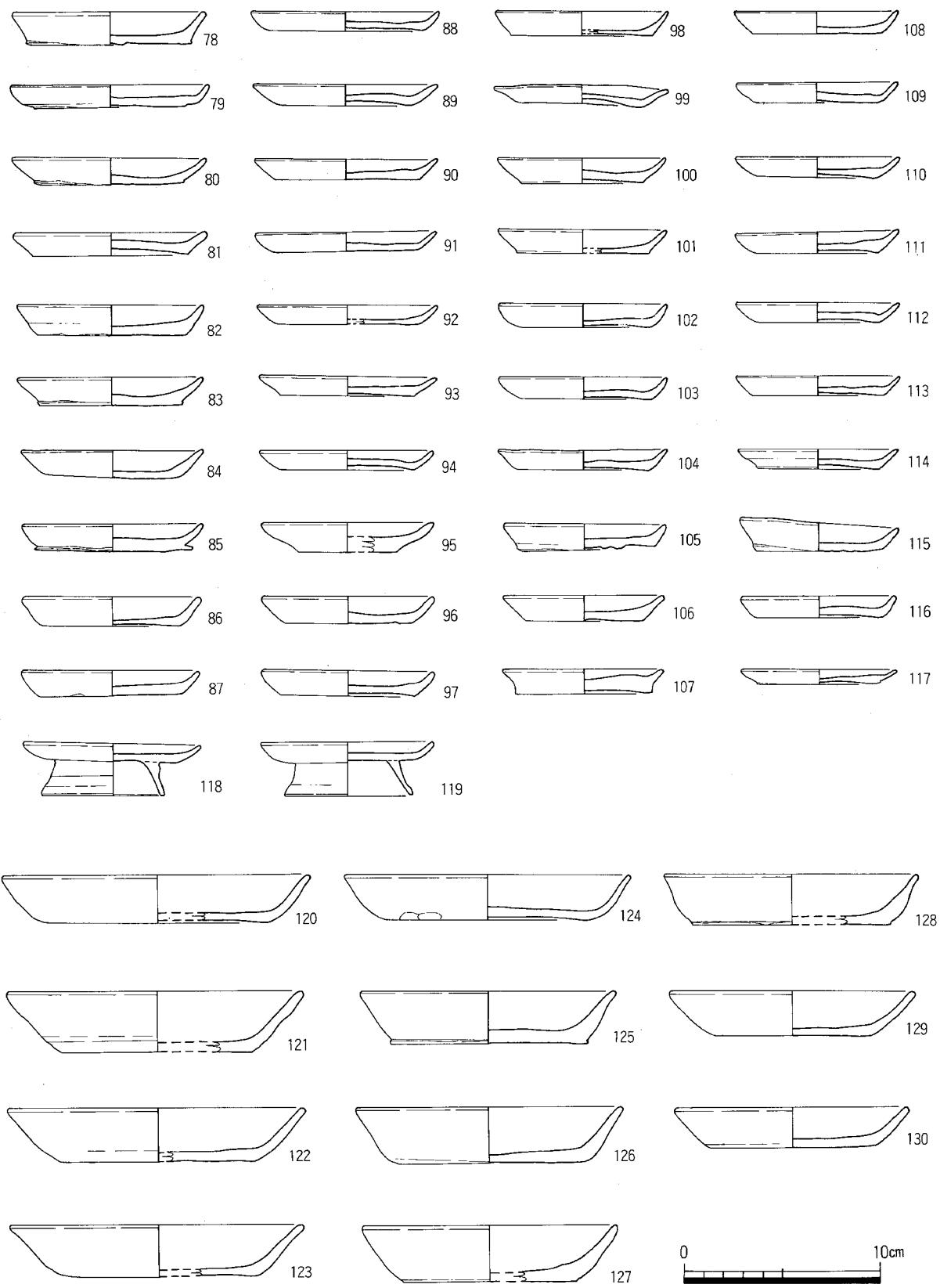
72は土鈴である。高さ4.6cm、幅3.1cmを測る。完形品。73は白磁碗の底部で、底径6.1cmを測る。内底に沈線がめぐる。74～77は青磁碗である。74は口径16.8cm。75は口径15.8cmで口縁端部が短く外反する。76は底径4.8cm。同安窯系。77は底径5.4cmを測る。

SK27土壙（Ph. 4）

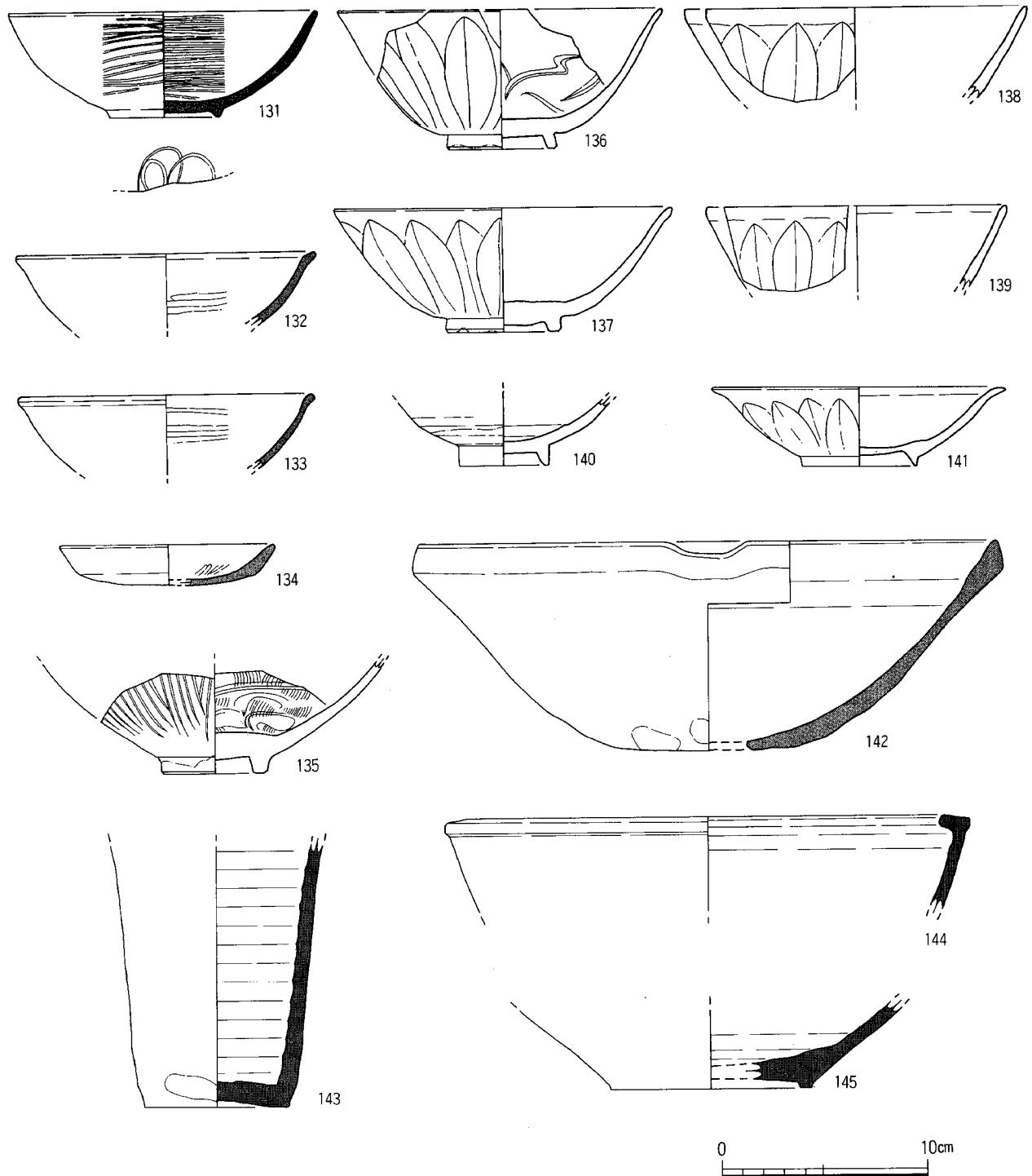
F-3区に位置する楕円形土壙で、長軸110cm、短軸90cm、深さ85cmを測る。人頭大から拳大の礫石が大量に投げ込まれており、土器も大量に出土した。出土遺物より13世紀前半ごろに位置付けられる。

出土遺物（第9図78～130、第10図131～145、Ph. 9）

78～117は土師器小皿である。口径10.0～8.0（平均値8.84）cm、器高1.7～0.8（平均値1.24）cm、底径8.3～5.0（平均値6.74）cmを測る。いずれも底部糸切り離しである。板状圧痕をもつものが多いなか、81、98、107の3個体は糸切り後未調整である。色調はにぶい橙～にぶい黄橙のものが多い。118、119は脚付の小皿である。口径、器高、底径は118が9.0～2.8～6.5cm、119が8.8～2.8～6.5cmを測る。118は脚の軸が皿の中心からずれる。120～130は土師器坏である。口径15.6～12.0（平均値13.84）cm、器高3.1～2.1（平均値2.63）cm、底径11.0～8.0（平均値9.73）cmを測る。いずれも底部糸切り離しである。129は糸切り後未調整。131～133は瓦器碗である。131は口径15.0cm、器高5.1cm、底径5.4cmを測る。内外面ともに細かいミガキが密に施されている。畿内産の瓦器である。132は口径14.6cm、133は口径14.4cmで、ミガキは粗い。134は瓦器の小皿である。口径10.4cm、器高2.0cm、底径8.6cmを測り、内面に細かいミガキを施す。135は同安窯系青磁碗。底径5.2cmで、内面にヘラ描きの花文、外面に粗い櫛描文を施す。136～139は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。136は口径15.8cm、器高6.8cm、底径5.4cmを測り、内面にも文様がある。焼成不良で釉が白濁。140は白磁碗



第9図 SK27出土土器①(1/3)



第10図 SK27出土土器②(1/3)

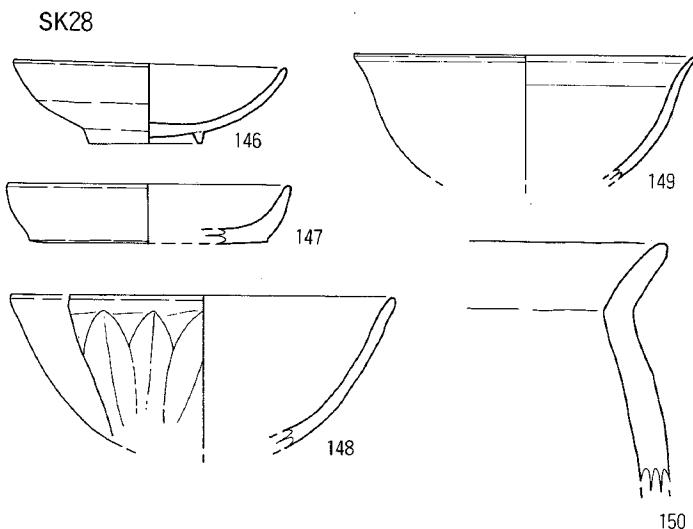
の底部で、底径4.4cm。141は龍泉窯系青磁の杯である。口径14.3cm、器高3.8cm、底径5.6cmを測り、外面に鎧蓮弁文を施す。142は瓦器の片口鉢である。口径28.8cm、器高10.2cm、底径9.0cmを測る。灰白色を呈し、底部を外側から打ち欠いているようだ。143は陶器の壺。底径7.0cm。内面に水挽きの痕跡が明瞭に残る。褐灰色を呈する。144、145は焼締陶器の小型甕か。同一個体であろう。144は口径25.6cm、145は底径9.8cmを測る。赤褐色を呈する。

SK28土壤

F、G-3区に位置する円形土壙で、径95~105cm、深さ20cmを測る。

出土遺物（第11図146~150）

146は土師器の高台付椀である。口径10.9cm、器高3.4cm、底径4.5cmを測る。147は土師器の壊。口径11.4cm、器高2.4cm、底径9.4cmを測り、底部糸切り。148は龍泉窯系青磁碗。口径15.4cmで、外面に鎬蓮弁文を施す。149は口ハゲの白磁碗で、口径13.8cm。150は土師器の甕の口縁部。橙色を呈する。

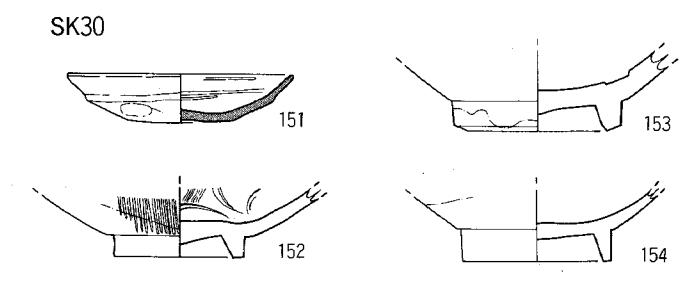


SK30土壤

F-2区に位置する円形土壙で、径110cm、深さ35cmを測る。

出土遺物（第11図151~154）

151は瓦器の小皿。口径9.0cm、器高2.0cm、底径3.6cmを測る。内面にミガキ、外面はでこぼこで指頭圧痕が残る。152は青磁碗の底部。底径5.2cm。153、154は白磁碗の底部。153は底径6.8cmで、内底を蛇の目釉はぎ。154は底径6.0cmを測り、外底に墨書を有する。



第11図 SK28、30出土土器(1/3) 0 10cm

(2) 近世の遺構と遺物

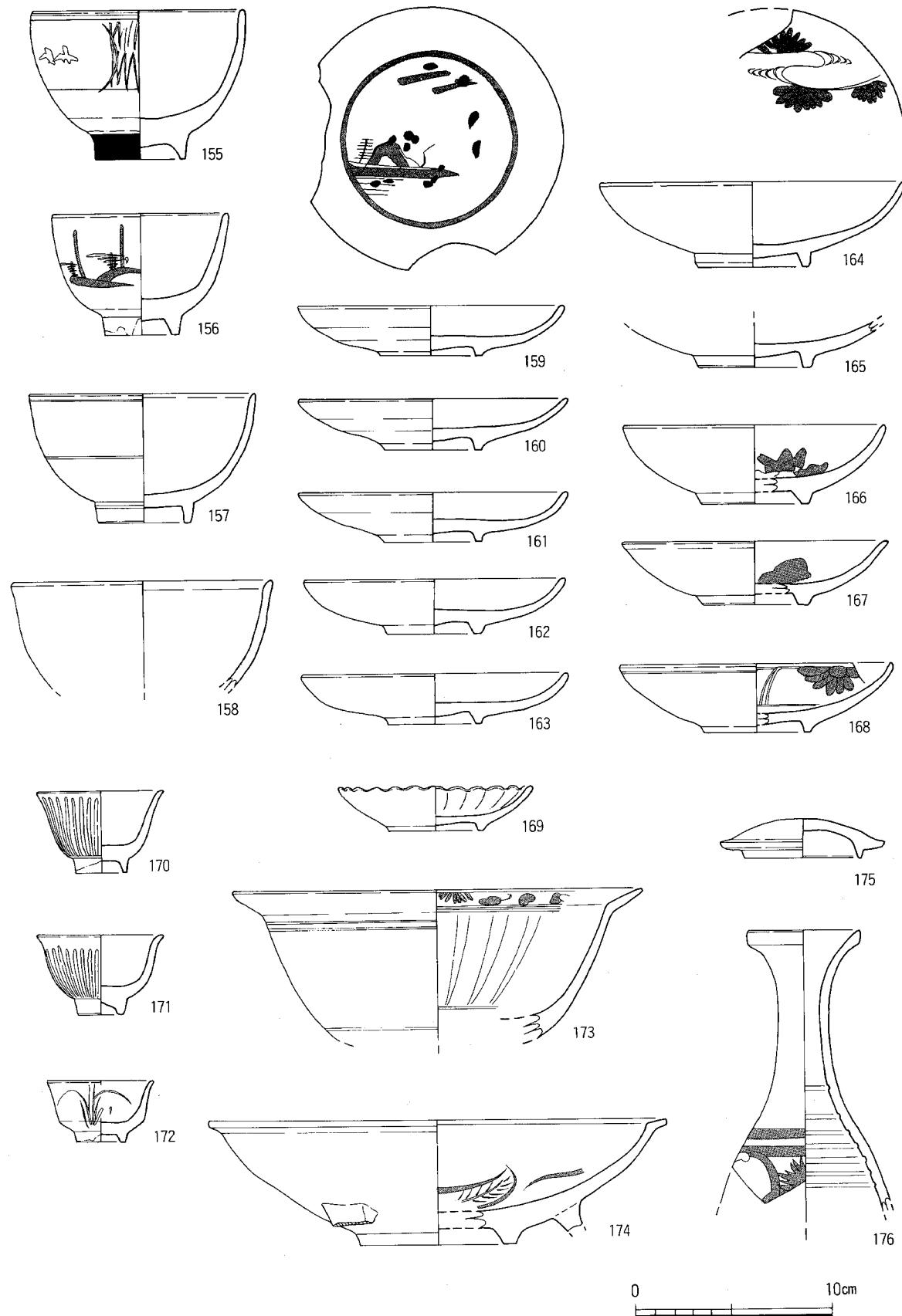
近世の遺構は少なく、A-4グリッドのSX13とB、C-4グリットのSE14の2基のみである。SX13は調査区境界に位置するため一部しか確認できなかったが、井戸と思われる。

SE14井戸

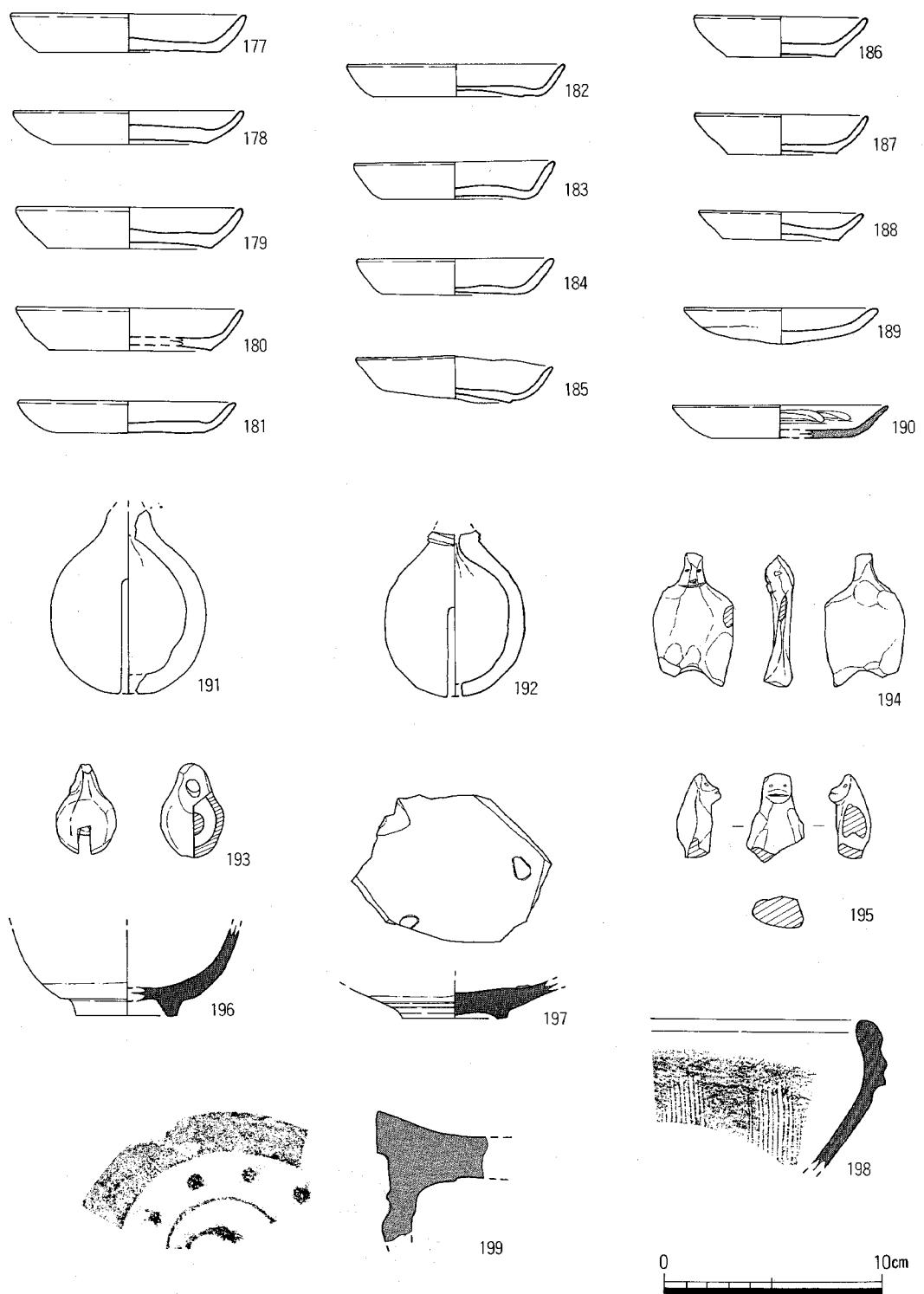
B、C-4グリットに位置する素掘りの井戸である。堀り方は120~140cmの円形を呈し、中央に径40cmの井筒部分を掘り込む。遺構面からの深さは135cmである。出土遺物より、17世紀前半に位置付けられる。

出土遺物（第12図155~176、第13図177~199）

155~157は染付碗である。155は口径11.0cm、器高7.7cm、底径4.7cmを測る。灰白釉を掛けた後、高台に鉄釉を施釉する。156は口径9.0cm、器高6.3cm、底径3.8cmを測る。157は口径11.6cm、器高6.7cm、底径4.8cmで、大きく焼けひずむ。158は白磁碗で口径11.4cm。159~168は染付皿である。159~163の5枚は同じ文様の組品であり、見込に山水文を描く(Ph. 8)。口径13.4~13.8cm、器高2.6~2.8cm、底径4.8~5.2cmを測る。164、165も組品で見込に菊流水文を描く。口径15.6cm、器高4.4cm、底径5.6cmを測る。166、167の2枚も組品で見込に雑な花文を描く。口径、器高、底径は166が13.4~14.1cm、167が13.6~14.1cmである。168は口径14.0cm、器高3.5cm、底径5.4cmを測り、



第12図 SE14出土土器①(1/3)



第13図 SE14出土土器②(1/3)

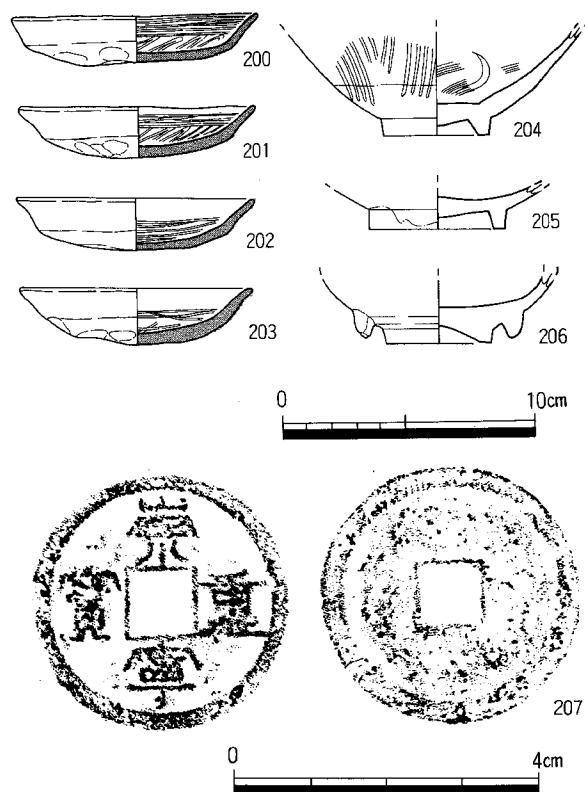
見込に菊花文を描く。169は染付小皿で口縁は輪花。型押し成形で、見込に大きく菊花を描く。口径10.0cm、器高2.3cm、底径4.8cmを測る。170、171は白磁の小坏で、外面にヘラ彫りで鎧蓮弁状に施文する。法量は170が6.4-4.2-2.6cm、171が6.4-4.0-2.4cmを測る。172は染付の小坏で、外面に草花文を施文する。口径5.4cm、器高3.2cm、底径2.6cm。173は染付鉢で、口径21.0cmで、深い。174は青磁鉢で口径23.4cm、器高6.4cm、底径8.0cmを測る。短い脚がおそらく3本つく。175は白磁で壺の蓋か。口径8.4cm、器高2.0cmを測る。内面は無釉。176は染付瓶で口径5.8cmを測る。177~189は土師器小皿である。口径10.8~7.6(平均値9.38)cm、器高2.0~1.3(平均値1.73)cm、底径8.2~5.0(平均値6.57)cmを測る。177~188は底部糸切り後未調整。189は手づくね成形。今回の調査では手づくね土師器はほとんど出土しておらず、10点に満たないようだ。190は瓦器小皿で、口径10.0cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。内面に細かなミガキを密に施す。191~193は土鈴である。191は残高8.4cm、幅7.2cm。192は残高7.5cm、幅6.3cm。193は小型で高さ4.3cm、幅2.9cm。194、195は手づくねの土人形である。195は猿か。196は陶器の碗。底径4.6cmで暗赤褐色を呈する。197は陶器皿で底径4.8cm。見込に3つの目跡が残る。198は陶器のすり鉢。にぶい赤褐色を呈する。199は三つ巴文の軒丸瓦。

(3) その他の出土遺物

以上、図化できる遺物が多く出土した遺構を主として報告してきた。実際には、遺構面全体に遺構が密集して分布し、出土遺物がコンテナ50箱に及ぶため、本来なら報告すべき遺構、遺物が多く存在する。しかし、紙面の都合上、それらは割愛せざるを得ない。ただ、未報告の遺構の時期および遺物の種類は上に報告してきたものと同様である。ここでは、とくに瓦器小皿、墨書土器、錢貨を探り上げ報告する。

第14図200~203は瓦器の小皿である。口径9.2~9.8cm、器高2.0~2.3cm、底径7.2~8.1cmを測る。いずれも外面体部中程に稜をもち、上半はヨコナデ、下半は指で整形し指頭圧痕が残る。内面はミガキを施し、平滑に仕上げる。200~202は規則的で細かなミガキで器壁が薄いのに対し、203はミガキの幅が太くみがきかたが不規則で、器壁が厚い。前者が畿内産の瓦器、後者が在地の瓦器であろう。

204~206は外底に墨書が書かれた土器である。文字は図版参照のこと(Ph.11~13)。204は青磁碗で底径4.2cm。205は白磁碗の底部で底径5.4cm。206は白磁の火入れである。内面は露胎のままで、外面に短い脚がつく。外底に「又」の字。207は「崇寧重寶」である。遺構検出作業中に出土した。大型の錢貨で北宋1103年が初鑄である。崇寧重寶には正規錢のほかに私鑄錢、磨輪錢があるが、これは正規錢である(参考文献:永井久美男編、1994、『中世の出土錢』)。



第14図 その他の出土遺物(1/3、1/1)

第三章 小 結

今回の調査は、標高2.0~2.1mの黄褐色粗砂層上面の1面についておこなった。深く掘り込まれた攪乱等の土層を観察した結果、この面より下は自然堆積の砂層であり、さらに古い遺構面および包含層は存在しない。調査の結果、12世紀後半が主体で一部に13世紀前半にくだる時期のものを含む井戸3基、土壙25基、溝3条、柱穴多数と、17世紀前半の井戸1基、性格不明遺構（井戸か）1基を検出した。主な出土遺物は中世前期の土師器、輸入陶磁器、瓦器、陶器で、ほかに近世の染付や瓦が出土している。遺物総量はコンテナ50箱におよぶ。

前章で主な出土遺物について報告したが、遺跡の性格を掴むために、出土遺物内容の量的な把握を同時にを行うことが有効である。主要な遺構について、出土遺物の破片数を計量した結果を第1表に示す。主要遺構出土破片総数は5083点である。整理作業の時間が充分に取れないために、柱穴や包含層、攪乱出土遺物については計量していないが、コンテナの割合から見積もると、調査全体では1万5000点程度の数になる。土師器や磁器（白磁、青磁、染付）が全体に占める割合を比較することで各遺構の性格の違いが明らかになる可能性もあるので、それらの割合も示している。計量的分析で気付いた点を補足したい。

第1表 主要遺構出土土器破片数

遺構番号	土師器	白磁	青磁	陶器	瓦器	須恵器	染付	その他	合計	土師器率	磁器率
SK27	1254	21	32	46	35	10	0	10	1408	0.89	0.04
SE02	404	41	88	53	39	35	0	27	687	0.59	0.19
SE14	192	32	22	43	13	19	40	26	387	0.5	0.24
SK32	149	25	38	54	22	6	1	11	306	0.49	0.21
SK07	170	18	31	36	13	2	0	3	273	0.62	0.18
SK26	146	3	23	17	12	4	0	0	205	0.71	0.13
SD36	117	3	24	19	16	5	0	2	186	0.63	0.15
SE01	75	12	33	20	4	20	0	17	181	0.41	0.25
SK21	100	4	13	14	1	0	0	1	133	0.75	0.13
SE34	92	5	10	7	5	4	0	5	128	0.72	0.12
SX13	80	7	9	15	7	3	4	1	126	0.63	0.16
SK24	75	7	20	11	6	0	0	0	119	0.63	0.23
SK25	71	9	28	8	1	0	0	0	117	0.61	0.32
SK30	58	9	5	4	20	2	0	0	98	0.59	0.14
SK23	43	4	8	3	31	1	0	0	90	0.48	0.13
SK35	53	4	10	6	11	0	0	0	84	0.63	0.17
SK17	35	3	8	1	20	7	0	1	75	0.47	0.15
SK28	37	9	9	7	7	1	0	2	72	0.51	0.25
SK28	34	6	6	4	11	2	0	0	63	0.54	0.19
SK15	28	2	0	0	15	1	0	3	49		
SK33	26	6	0	7	6	0	0	0	45		
SD31	27	2	1	5	0	5	0	0	40		
SK08	19	11	0	4	2	0	0	2	38		
SK20	22	2	2	0	11	0	0	0	37		
SK10	10	3	1	13	6	2	0	0	35		
SK11	15	0	3	5	3	3	0	0	29		
SK16	18	3	5	0	1	0	0	0	27		
SK19	15	4	1	0	2	2	0	1	25		
SK12	4	4	0	3	3	6	0	0	20		
合計	3369	259	430	405	323	140	45	112	5083	0.66	0.14

※土師器率は全体に占める土師器の割合
磁器率は全体に占める白磁・青磁・染付の割合

まず、磁器の割合が全体で14%、SE01、SE02、SK25等では25%近くを占める。以前筆者が発掘調査に参加させていただいた大分県国東半島における同時期の調査では、輸入陶磁器はほとんど出土せず、小片でも非常に貴重品扱いした記憶がある。また陶磁器が少ない代わりに瓦器は相当数出土した。今回はじめて博多遺跡群の調査に携わったが、輸入陶磁器の多さは本当に驚きをもって体感した。

瓦器も相当数出土し全体の6%を占める。筆者は瓦器は輸入陶磁器を補完するものと漠然と思っていたが、輸入陶磁器が比較的入手しやすい博多でも意外と多く出土している。在地産の瓦器に混じって、畿内産の瓦器椀・小皿もかなり存在する点、当時の物流を考える上で興味深い。

さて、個別の遺構ではSK27土壙に注目したい。約1m四方、深さ80cmのそれほど大きくない土壙から、1408点という大量の土器が出土しており、とくに土師器がほぼ90%を占め、壺・小皿の完形品、あるいは完形に接合できるものが相当数出土している。この土壙には人頭大から拳大の礫石が不規則に投入されており、魚骨や炭化物等の生活残滓（ごみ）は見られない。大庭康時氏が博多遺跡群の土師器一括廃棄遺構について検討しているが（大庭康時、1999、「博多かわらけ考1」、『博多研究会誌』7）、この遺構もただのごみ廃棄遺構とは異なるのではないか。

次に、息の浜西端部の土地利用という観点から整理してみたい。本地点で人々が生活を始めるのは12世紀後半からである。12世紀後半の遺構が最も多く、13世紀前半までの遺構が見られる。その後中世後期の遺構、遺物はなく、次に出土するのは17世紀前半、近世の遺構である。1面のみの調査のため確かなことは言えないが、表土すき取り中の採集遺物、包含層や攪乱出土遺物の中にも中世後期の遺物はほとんど含まれていないようだ。従来、息の浜が都市化するのは12世紀後半から13世紀頃とされているので、息の浜西端部が生活空間に取り込まれるのはやや遅れるということになろう。ただし、すぐ東の第78次調査地点では11世紀後半の遺構1基が検出されている。

では、いかなる土地利用をされていたのだろうか。息の浜西端部には室町時代には妙楽寺があった。また第78次調査地点の12世紀後半～13世紀前半の遺構面（第3面）では、4基の土葬墓が検出され6体の人骨が出土しており、当時は墓地であったと推測されている。今回の調査では人骨が出土したSK11が確実な土葬墓としては唯一のものだが、SK11の近くに位置するSK12、SK19、SK20の各土壙も遺構形状および出土土器量の少なさから、土壙墓の可能性は高い。一方、一面に柱穴が存在すること、井戸や（区画）溝の存在は墓地よりもむしろ人々が頻繁に活動していた場所を想起させる。墓地と住居が隣接して存在する光景が果たしてあったのか、調査面積が狭く土地利用のありかたはよく分からぬ。周辺の調査が行われるまで、結論は持ち越したい。

第2表 遺物観察表

掲載番号	種類	器種	口径	出土遺構	底径	遺存状態	色調	備考
1	土師器	环	13.0	SE01	2.7	8.9 1/6	灰黄	
2	土師器	小皿	7.9	SE01	1.5	5.8	完形	系切、板状压痕 灰白釉
3	白磁	碗	16.0	SE01		体部1/10	浅黄	系切、板状压痕
4	青磁	碗	SE01		5.4	底部1/2	オリーブ灰釉	龍泉
5	青磁	碗	SE01		5.2	底部	明オリーブ灰釉	同安
6	陶器	壺	SE01	11.2		口縫1/4	オリーブ灰釉	
7	陶器	壺	SE01	8.8		口縫1/4	黒褐色釉	
8	土師器	环	SE02	16.4	2.5	12.8 1/4	黒褐色釉	にぶい黄
9	土師器	小皿	SE02	8.8	1.2	7.2 1/2	にぶい黄	にぶい黄
10	瓦器	椀	SE02	14.8	4.4	5.2 1/4	灰	系切、板状压痕
11	青磁	碗	SE02	15.4		体部1/4	灰オリーブ灰釉	同安
12	青磁	碗	SE02	16.4	7.3	6.0 1/4	オリーブ灰釉	同安
13	青磁	碗	SE02	13.2	5.8	4.4 1/6	灰オリーブ灰釉	同安
14	青磁	碗	SE02		6.2	底部1/2	灰オリーブ灰釉	同安、蛇の目輪はぎ
15	青磁	碗	SE02		4.2	底部	オリーブ黄釉	同安
16	白磁	碗	SE02	17.6	6.8	5.4 1/3	灰色釉	内面にテラコッタ文
17	白磁	碗	SE02		5.6	1/4	明オリーブ灰釉	
18	白磁	碗	SE02	16.4	6.9	5.0 1/4	灰白釉	
19	白磁	碗	SE02		6.6	底部3/4	灰白釉	見込みに椭円文
20	陶器	壺	SE02			底部片	燒緋陶器	
21	陶器	壺	SE02		16.0	底部片	灰赤	
22	土師器	环	SE34	14.0	2.7	9.2 1/4	灰白釉	燒緋陶器
23	土師器	环	SE34	12.8	2.5	9.0 1/3	浅黄	にぶい黄
24	青磁	碗	SE34		5.2	底部	オリーブ灰釉	龍泉、外室に墨書
25	青磁	碗	SE34		5.6	底部2/3	灰オリーブ灰釉	同安
26	陶器	壺	SE34			口縫部片	灰	
27	青磁	碗	SK07	15.6	7.8	5.2 1/4	オリーブ黄釉	龍泉
28	青磁	碗	SK07	16.0		体部1/8	オリーブ灰釉	龍泉
29	青磁	碗	SK07	15.2		体部1/6	浅黄釉	系切、板状压痕
30	青磁	碗	SK07		6.4	底部	オリーブ灰釉	金玉滿堂のスタンプ
31	土師器	小皿	SK07	8.8	1.4	7 3/4	にぶい黄	系切
32	土師器	小皿	SK07	8.8	1.5	7.0 1/3	にぶい黄	系切、板状压痕
33	陶器	盤	SK07	20.8		口縫1/8	オリーブ黄釉	
34	土師器	环	SK08	17.0	3.3	12 完形	浅黄	系切、板状压痕
35	土師器	环	SK08	15.4	2.5	11.4 1/4	にぶい黄	系切、板状压痕
36	土師器	小皿	SK08	9.0	0.9	7.6 完形	にぶい黄	系切、板状压痕
37	白磁	碗	SK08	17.4	7.0	6.2 3/4	灰白釉	にぶい黄
38	白磁	碗	SK08		6.4	底部	灰白釉	にぶい黄
39	瓦器	椀	SK08	13.0		口縫1/8	灰白	にぶい黄
40	瓦器	椀	SK08		5.1	底部		にぶい黄
41	滑石製品	石鍋	SK08			口縫1/10	白色釉	にぶい黄
42	瓦器	椀	SK12	16.0	6.0	7.2 1/10	灰白	にぶい黄
43	白磁	碗	SK12	14.6		口縫1/8	灰白釉	にぶい黄
44	白磁	碗	SK12	15.0		口縫1/8	灰白釉	にぶい黄
45	白磁	碗	SK12	15.0		耳	灰白	にぶい黄
46	白磁	皿	SK12		4.2	底部	白色釉	にぶい黄
47	土師器	高台付碗	SK23	13.4	4.3	6.4 2/3	完全	にぶい黄
48	瓦器	椀	SK23	14.0	4.9	5.7 2/3	灰	にぶい黄
49	白磁	碗	SK23	15.8		口縫部1/6	灰白釉	にぶい黄
50	白磁	碗	SK23		6.6	底部1/2	灰白釉	にぶい黄

掲載番号	種類	器種	口径	出土遺構	底径	遺存状態	器高	口径	出土遺構	器種	種類	器種	出土遺構	底径	遺存状態	色調	備考
51	青磁	碗	SK23				7.0	底部1/2	灰オリーブ灰釉	蛇の目輪はぎ							
52	白磁	碗	SK23				6.0	底部3/4	灰白釉								
53	土師器	小皿	SK24				9.5	1.4	7.5 完形	にぶい黄	にぶい黄						
54	土師器	小皿	SK24				9.0	1.4	6.9 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
55	土師器	小皿	SK24				8.6	1.1	6.2 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
56	土師器	小皿	SK24				8.5	1.5	6.3 完形	にぶい黄	にぶい黄						
57	瓦器	椀	SK24				15.6		体部1/8	灰							
58	白磁	碗	SK24				17.2		体部1/10	灰白釉	蛇の目輪はぎ						
59	白磁	碗	SK24				6.4		底部1/2	オリーブ灰釉	同安						
60	青磁	碗	SK24				5.0		底部	明オリーブ灰釉	同安						
61	青磁	碗	SK24				12.0	5.3	4.2 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
62	青磁	碗	SK24				6.2		底部1/2	オリーブ灰釉	同安						
63	青磁	碗	SK24				5.6		底部	灰白釉	同安						
64	土師器	坏	SK25				16.2	3.5	11.4 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
65	土師器	小皿	SK25				9.6	0.9	6.6 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
66	土師器	小皿	SK25				8.9	1.3	6.2 完形	所持	系切	板状压痕					
67	瓦器	こな鉢	SK25				13.8		口縫部片	灰							
68	青磁	碗	SK25				14.0		体部1/4	灰白釉	龍泉						
69	青磁	碗	SK25				12.2		体部1/4	明オリーブ灰釉	同安						
70	白磁	碗	SK25				6.0		底部	灰白釉	同安						
71	青磁	皿	SK25				13.8	3.4	5.4 2/3	オリーブ灰釉	高さ4.6、幅3.1						
72	土製品	鈴	SK25				9.8		底部	灰白釉	にぶい黄						
73	白磁	碗	SK26				10	1.2	6.6 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
74	青磁	碗	SK26				9.4	1.4	7.2 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
75	青磁	碗	SK26				16.8		口縫部	灰							
76	青磁	碗	SK26				15.8		口縫部3/3	灰							
77	青磁	碗	SK26				4.8		底部	灰白釉	同安						
78	土師器	小皿	SK27				5.4		底部	灰白釉	にぶい黄						
79	土師器	小皿	SK27				9.8	1.7	8.3 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
80	土師器	小皿	SK27				10		1.2	6.6 1/2	にぶい黄						
81	土師器	小皿	SK27				9.8	1.3	7.6 1/3	にぶい黄	にぶい黄						
82	土師器	小皿	SK27				9.4	1.6	7.4 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
83	土師器	小皿	SK27				9.4	1.4	7.2 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
84	土師器	小皿	SK27				9.2	1.6	6.2 完形	にぶい黄	にぶい黄						
85	土師器	小皿	SK27				9.2	1.5	7.4 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
86	土師器	小皿	SK27				9.0	1.5	7.0 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
87	土師器	小皿	SK27				9.0	1.4	7.2 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
88	土師器	小皿	SK27				9.6	1.0	7.5 3/4	にぶい黄	にぶい黄						
89	土師器	小皿	SK27				9.4	1.1.0	6.6 1/2	にぶい黄	にぶい黄						
90	土師器	小皿	SK27				9.3	1.1.0	7.3 完形	明褐色	にぶい黄						
91	土師器	小皿	SK27				9.2	1.0	7.4 完形	にぶい黄	にぶい黄						
92	土師器	小皿	SK27				9.2	1.0	7.2 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
93	土師器	小皿	SK27				9.0	1.0	6.8 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
94	土師器	小皿	SK27				8.8	1.0	6.8 3/4	にぶい黄	にぶい黄						
95	土師器	小皿	SK27				8.8	1.5	5.0 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
96	土師器	小皿	SK27				8.8	1.0	6.4 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
97	土師器	小皿	SK27				8.8	1.3	6.8 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
98	土師器	小皿	SK27				8.8	1.3	7.2 1/4	にぶい黄	にぶい黄						
99	土師器	小皿	SK27				8.9	1.2	6.2 完形	にぶい黄	にぶい黄						
100	土師器	小皿	SK27				8.6	1.3	6.2 1/6	にぶい黄	にぶい黄						

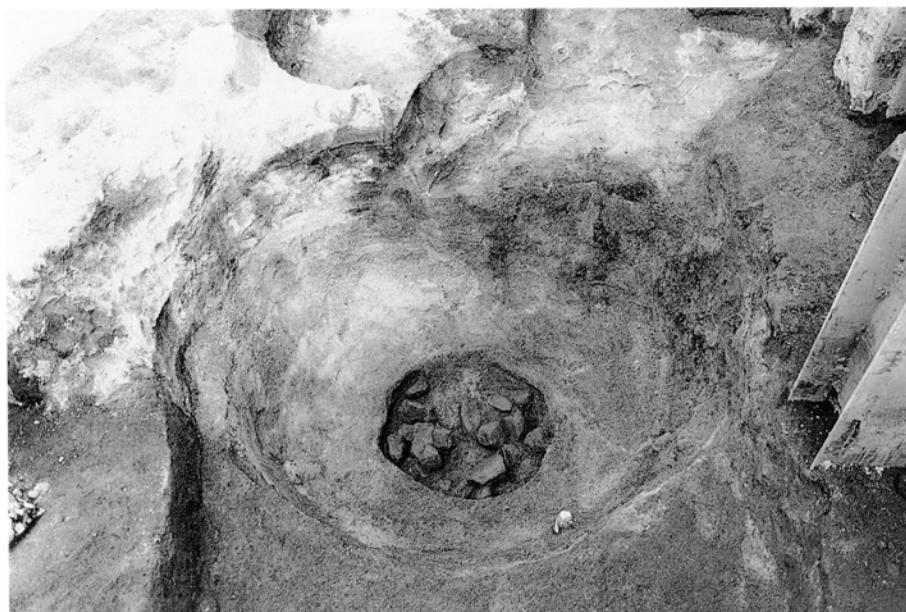
掲載番号	種類	器種	出土遺構	口径	器高	底径	遺存状態	色調	備考		種類	器種	出土遺構	口径	器高	底径	遺存状態	色調
									小皿	SK30	9.0	2.0	3.6	底部	2/3	灰	オリーブ黄釉	
101	土師器	小皿	SK27	8.6	1.2	6.6	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	151	瓦器	碗	SK30				ナリーブラウン	同安
102	土師器	小皿	SK27	8.6	1.2	6.6	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	152	青磁	碗	SK30				6.8	底部2/3
103	土師器	小皿	SK27	8.6	1.1	6.6	完形	にぶい橙	糸切	153	白磁	碗	SK30				6.0	底部2/3
104	土師器	小皿	SK27	8.6	1.1	6.8	3/4	にぶい黄澄	糸切	154	白磁	碗	SK30				4.7	1/3
105	土師器	小皿	SK27	8.3	1.4	6.1	完形	浅黄澄	糸切、板状压痕	155	染付	碗	SE14	11.0	7.7	4.7	灰白釉	
106	土師器	小皿	SK27	8.2	1.3	6.0	1/3	にぶい橙	糸切、板状压痕	156	染付	碗	SE14	9.0	6.3	3.8	灰白釉	
107	土師器	小皿	SK27	8.2	1.3	7.0	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	157	染付	碗	SE14	11.6	6.7	4.8	1/4	
108	土師器	小皿	SK27	8.4	1.2	6.6	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	158	白磁	碗	SE14	11.4	2.6	5.2	4/5	
109	土師器	小皿	SK27	8.3	1.1	6	完形	にぶい橙	糸切、板状压痕	159	染付	皿	SE14	13.6	2.6	5.0	明青灰釉	
110	土師器	小皿	SK27	8.4	1.1	6.1	完形	にぶい橙	糸切、板状压痕	160	染付	皿	SE14	13.8	2.6	5.0	灰白釉	
111	土師器	小皿	SK27	8.4	1.1	6.3	完形	橙	糸切、板状压痕	161	染付	皿	SE14	13.4	2.8	4.8	1/4	
112	土師器	小皿	SK27	8.4	1.0	6.0	1/3	にぶい橙	糸切、板状压痕	162	染付	皿	SE14	13.4	2.8	5.4	明青灰釉	
113	土師器	小皿	SK27	8.4	1.0	6.8	1/4	橙	糸切	163	染付	皿	SE14	13.6	2.6	5.6	164~165は組品	
114	土師器	小皿	SK27	8.3	1.1	6.3	完形	にぶい黄澄	糸切、板状压痕	164	染付	皿	SE14	15.6	4.4	5.6	164~165は組品	
115	土師器	小皿	SK27	8.2	1.7	6.5	完形	にぶい橙	糸切、板状压痕	165	染付	皿	SE14	13.6	2.6	5.6	166~167は組品	
116	土師器	小皿	SK27	8.0	1.1	6.6	1/3	にぶい黄澄	糸切、板状压痕	166	染付	皿	SE14	13.4	4.1	5.6	166~167は組品	
117	土師器	小皿	SK27	8.0	0.8	6.4	3/4	にぶい黄澄	糸切、板状压痕	167	染付	皿	SE14	13.6	3.3	5.4	灰白釉	
118	土師器	脚付小皿	SK27	9.0	2.8	6.2	2/3	にぶい橙	糸切、板状压痕	168	染付	皿	SE14	14.0	3.5	5.4	1/4	
119	土師器	脚付小皿	SK27	8.8	2.8	6.5	完形	にぶい橙	糸切、板状压痕	169	染付	小皿	SE14	10.0	2.3	4.8	1/3	
120	土師器	环	SK27	15.6	2.5	11.0	1/3	にぶい黄澄	糸切	170	白磁	小环	SE14	6.4	4.2	2.6	白色釉	
121	土師器	环	SK27	15.0	3.1	9.6	1/6	にぶい橙	糸切	171	白磁	小环	SE14	6.4	4.0	2.4	白色釉	
122	土師器	环	SK27	15.0	2.8	9.8	1/3	橙	糸切、板状压痕	172	染付	小环	SE14	5.4	3.2	2.6	白色釉	
123	土師器	环	SK27	14.8	2.7	10.2	1/4	にぶい黄澄	糸切	173	染付	鍵	SE14	21.0	休部1/4		灰白釉	
124	土師器	环	SK27	14.6	2.3	10.6	1/3	深黄澄	糸切	174	青磁	鍵	SE14	23.4	6.4	8.0	1/4	
125	土師器	环	SK27	13.0	2.7	10.2	1/3	浅黄澄	糸切	175	白磁	盖	SE14	8.4	2.0	1/2	明碌灰釉	
126	土師器	环	SK27	13.6	2.9	10.2	1/2	橙	糸切、板状压痕	176	染付	瓶	SE14	5.8	上半		灰白釉	
127	土師器	环	SK27	13.0	2.9	8.8	1/4	にぶい黄澄	糸切	177	土師器	小皿	SE14	10.8	1.8	8.2	系切未調整	
128	土師器	环	SK27	13.0	2.6	10.2	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	178	土師器	小皿	SE14	10.6	1.6	7.0	1/4	
129	土師器	环	SK27	12.6	2.3	8.0	1/3	浅黄澄	糸切	179	土師器	小皿	SE14	10.4	1.9	7.4	1/3	
130	土師器	环	SK27	12.0	2.1	8.6	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	180	土師器	小皿	SE14	10.4	1.9	7.4	1/3	
131	瓦器	碗	SK27	15.0	5.1	5.4	1/2	灰	畿内産	181	土師器	小皿	SE14	10.0	1.5	6.8	系切未調整	
132	瓦器	碗	SK27	14.6				口縁1/6	灰白	182	土師器	小皿	SE14	10.0	1.5	7.6	1/3	
133	瓦器	碗	SK27	14.4				口縁1/4	灰白	183	土師器	小皿	SE14	9.2	1.8	6.6	系切未調整	
134	瓦器	小皿	SK27	10.4	2.0	8.6	1/4	暗灰	糸切未調整	184	土師器	小皿	SE14	9.0	1.7	6.0	系切未調整	
135	青磁	碗	SK27	12.0	2.1	8.6	1/4	にぶい橙	糸切、板状压痕	185	土製品	小皿	SE14	9.0	2.0	6.3	1/2	
136	青磁	碗	SK27	15.8	6.8	5.4	1/4	灰	畿内産	186	土製品	小皿	SE14	8.0	1.9	5.0	にぶい黄澄	
137	青磁	碗	SK27	16.4	6.1	5.6	完形	オリーブ灰釉	糸切	187	土師器	小皿	SE14	8.0	1.9	5.0	にぶい黄澄	
138	青磁	碗	SK27	16.6				口縁1/4	綠灰釉	188	土師器	小皿	SE14	7.6	1.3	5.4	にぶい黄澄	
139	青磁	碗	SK27	14.6				8.6	1/4	189	土師器	小皿	SE14	9.0	1.7	6.0	手づくわ	
140	青磁	碗	SK27	15.6				4.4	底部1/3	190	瓦器	小皿	SE14	10.0	1.5	6.4	1/2	
141	青磁	杯	SK27	14.3	3.8	5.6	1/2	灰	明碌灰釉	191	土製品	鉢	SE14				にぶい黄澄	
142	瓦器	片口鉢	SK27	28.8	10.2	9.0	4/5	口白	底を打ち欠く	192	土製品	擂钵	SE14				にぶい灰釉	
143	陶器	壺	SK27	14.6				7.0	下半	193	土製品	人形	SE14				にぶい黄澄	
144	陶器	小型甕	SK27	25.6				4.4	底部1/2	194	土製品	人形	SE14				残高8.4、幅7.2	
145	陶器	小型甕	SK27	14.3	3.8	5.6	1/2	灰	明碌灰釉	195	土製品	碗	SE14				にぶい黄澄	
146	土師器	高台付椀	SK28	10.9	3.4	4.5	2/3	青磁	底を打ち欠く	196	土製品	陶器	SE14				残高5.4、幅6.3	
147	土師器	环	SK28	11.4	2.4	9.4	1/6	青磁	底を打ち欠く	197	土製品	陶器	SE14				高さ4.3、幅6.2	
148	青磁	碗	SK28	15.4				体部1/8	綠灰釉	198	土製品	陶器	SE14				高さ4.1、幅6.2	
149	白磁	碗	SK28	13.8				口縁1/2	灰白釉	199	青磁	碗	SE14				外底に墨書	
150	土師器	甕	SK28					口縁1/8	龍泉	200	瓦器	小皿	SE14				外底に墨書	
										201	瓦器	小皿	SE14				外底に墨書	
										202	瓦器	小皿	SE14				外底に墨書	
										203	瓦器	小皿	SE14				外底に墨書	
										204	青磁	碗	SE14				外底に墨書	
										205	白磁	碗	SE14				外底に墨書	
										206	白磁	火入九	SE14				外底に墨書	
										207	食食	食食	SE14				外底に墨書	



Ph. 1 調査区全景（南西から）



Ph. 2 SE02井戸周辺（東から）



Ph. 3 SE01井戸（南東から）



Ph. 4 SK27土壤（北西から）



Ph. 5 SK11人骨出土状況（北から）



Ph. 6 SK23出土土師器椀



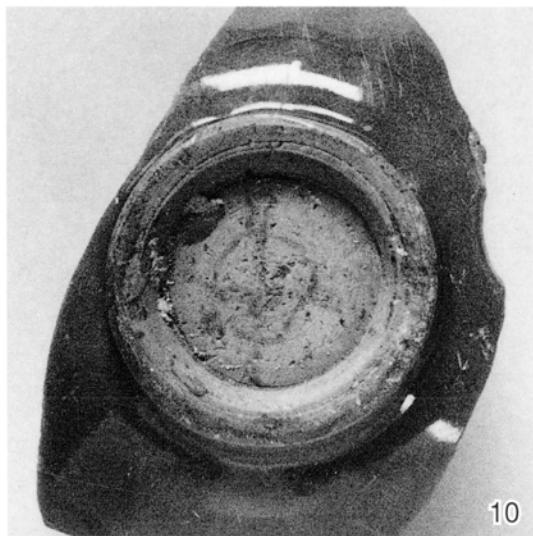
Ph. 7 SK07出土青磁碗



Ph. 8 SE14出土染付皿



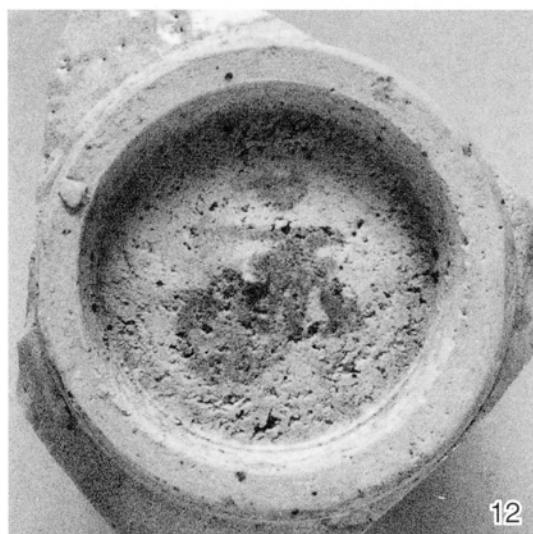
Ph. 9 SK27出土土師器



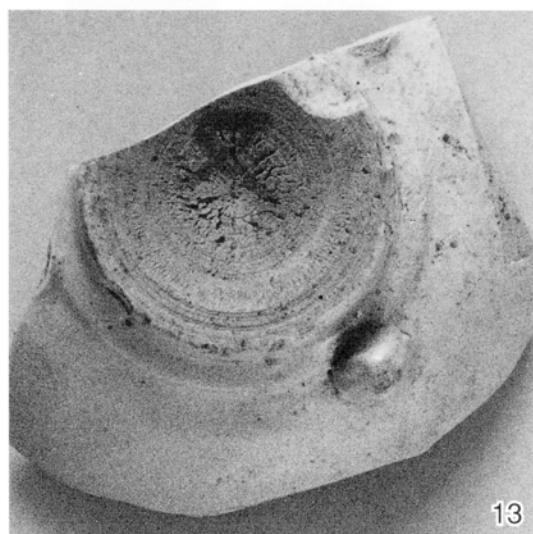
10



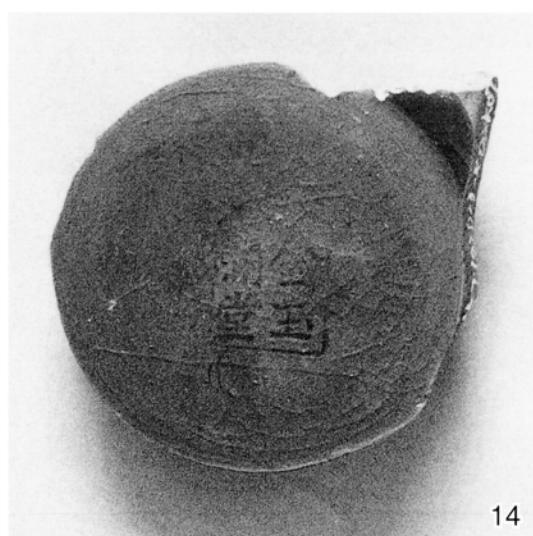
11



12



13



14

墨書土器等

- Ph.10 SE34出土青磁碗 (24)
- Ph.11 包含層出土青磁碗 (204)
- Ph.12 包含層出土白磁碗 (205)
- Ph.13 包含層出土白磁火入 (206)
- Ph.14 SK07出土青磁碗 (30)



作業員のみなさん

(後列左から) 甲斐正耕、三浦 力、大塙 眞、井料国彦、坂下達夫、相良謙一、瀬戸啓治、高崎秀巳

(中列左から) 沢田悦子、一ノ瀬フミヨ、中村桂子

(前列左から) 宮田知明、岡部静江、加藤常信、浅井伸一、長野嘉一（敬称略）

博 多 79

—博多遺跡郡第123次調査報告—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書670集

2001年3月30日 発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮1丁目5番13号

